

三条西家古今学沿革資料襍攷

——実隆・公条・実枝、(附) 宮内庁書陵部蔵『実条公遺稿』(部分) 翻刻——

武井和人

一、はじめに

三条西家は実隆以後、江戸末期に至るまで、和学の家としてその位置を有した。その学問領域は広く、和学は無論、有職・香道にも権威があつたことは周知の事実である。ところが、ここに全く奇妙な証言があるのだ。

〔三条西家ノ古今学ニ関シテ〕実隆のそれは宗祇の伝授を受ける前のものが僅かに残っているに過ぎないというさびしさである。実隆の息三条西公条も、享祿元年から二年にかけて、後奈良院に進講したのをはじめ、何度も「古今集」を講じていたようであるが、その講釈の聞書や公条自身が執筆した「古今集」の注釈書は管見に入らない。(片桐洋一氏「中世古今集注釈書解題 四」〔赤尾照文堂〕昭59・6)

この片桐氏の証言が正しいとするならば、ことは大問題である。

何故なら、実隆・公条は、常縁↓宗祇の伝へられた《古今伝受》の正統な継承者であるはずだからだ。しかも宗祇は実隆のことを門弟の随一と認識してゐたと覚しいので、疑惑はますます増大するばかりである。ここで我々の取るべき方法は、次の二段階を経ることとならう。即ち、

(1) 片桐氏の証言を全面的に信用する前に、資料蒐集に遺漏はなかつたか、もう一度調べ直してみる。

(2) (1)の作業を通して、片桐氏の証言が首肯されるならば、この事実を如何に解釈するべきかを考へる(例へば、意識的忌避の可能性)。

無論、(1)の作業に完璧を求めるのは不可能だから、実際には(2)の考察をも同時に進めることとなるのだが、ともかくも、(1)の作業を試みることは必須である。そこで小論では、(1)の調査報告と、候補として拾ひ上げられた各々の資料の信憑性とその解釈を提示するこ

とにしたい。また、三条西家古今学の特色の一端も、併せて考察してみたい。

二、実隆・公条・実枝の注釈書

古今学は仮に上述のやうだとして、では、他の古典に関する注釈書がどのやうに残つてゐるかを確認し、それらと比較することによつて、古今学の異常さを確認することにしよう。

【源氏物語】

実隆には『弄花抄』『細流抄』がある他、厳密な意味では注釈書と呼べないものの、『源氏物語系図』もある。公条は、実隆の説を集成し自説を若干追補した『明星抄』がある他、中院通勝の『岷江入楚』に「秘」として引かれる説は、公条のものである。更に実枝には、未刊ながら『山下水』といふ膨大な注釈書があるし、『岷江入楚』に「箋」として引かれる説が実枝説である。

つまり、三条西家源氏学は、肖柏・宗祇・兼良あたりを直接の（師）と仰ぐ学統を、（その内容はともかくも、形の上ではきちんと継承してゐたことになる。やはり古今学とは異なるのである。

【伊勢物語】

実隆の注釈書として、かつて大津有一氏が『伊勢物語古註釈の研究』（京都宮書店昭和29・3）の中で掲げられたものは、以下の四書である。

* 寛校聞書（実隆↓寛校、未刊、書院部蔵）

* 伊勢物語直解（実隆↓？）

——『中古文学』34（昭和59・10）

がある。(b)は、従来実隆説を荒木田守武が聞書したものと見做されて来た神宮本が、実は公条講釈の聞書であること、(c)は、宗祇・三条西家流の伊勢学の方法として、①物語を「仮相」として見る、②儒教的政教主義を基盤にした好色否定や教訓性、などが考へられる、といった点を論じたものである。これも、先の伊藤氏論文とともに、小論に有効な視座を与へてくれるものであらう。

なほ(a)に、陽明文庫蔵『伊語聴説』（実隆↓杉原伊賀守孝盛が紹介されてをり、実隆の勢語注は都合五書となるわけである。

公条には『称談集解』（未刊、学習院大学国文研他）があるが、研究はまだ深化してゐない。

最後の実枝だが、大津氏が確実な資料を指摘されえなかつた通り、現在でもまとまつた注釈書を見出すことは甚だ困難である。ただ、実枝説を伝えるものとして、慶応義塾大学附属図書館に所蔵される『伊勢物語聞書（九神抄）』（一一〇X・一一〇二）をあげることが出来る。その奥書には次のやうにある（句読点・返点私意、以下同様）。

右抄、為「愚老」追称父子講談之旨、

猶再問等具以注「置之」矣。又近年、実枝卿

令「請」益「之趣」、於「其外」宗祇法師内証

端「書」加之。秘之中極秘也。雖「然」、依「執

心深重」、許「橘秀弘書写」訖。

天正第廿曆孟冬下旬 玖山（九条種通）臺六老人

〔参考〕『慶應義塾圖書館藏和漢書善本解題』（昭33・11）

* 遺談聴（実隆↓公条、未刊、書院部・都立中央等蔵）

* 伊勢物語惟清抄（実隆↓清原宣賢、天理図書館に宣賢自筆本あり）

これら四書については、伊藤敬氏「三条西実隆著作ノート」（リポート笠間）22（昭和56・10）に細かな検討があり、実隆の伊勢学の精神が「一貫性と倫理性を深めた……それは同時に……実隆の人生観と相關し、誤解をはばからずに言えば、岡見正雄氏の、まだ神仏がのぞいていた「室町ごろ」という時代精神に重なるのではないか」と述べられた。「室町ごろ」云々は、個人的には共感を強く覚えるけれども、もう少し検証が必要と思はれる。それはともかく、実隆の伊勢学の根幹に、①一貫性、②倫理性を据ゑたことは、画期的な業績といへよう。小論で考察する三条西家古今学に関しても、有用な視点と思はれるからである。

また、従来実隆の仮託書ではないかと疑はれて来た『伊勢物語直解』だが、青木賜鶴子氏の卓論(a)「『伊勢物語直解』の成立——その実隆作にあらずること——」（『中古文学』28（昭和56・11））が、厳密かつ実証的に真作説を完膚なきまでに否定してゐるのだから、もはや仮託書の一つとして考へるべきである。

因に、青木氏にはこの他に、三条西家伊勢学について述べた論文に、

(b)「神宮文庫蔵・守武本『伊勢物語聞書』は実隆説にあらず——三条西家流伊勢物語注釈の展開（二）——」（『百舌鳥国文』4（昭和59・9））

(c)「室町後期伊勢物語注釈の方法——宗祇・三条西家流を中心に

問題となるのは傍線部で、いささか解釈しにくいのだが、植通の要請に従つて、実枝が勢語注を追補した、の謂であらう。とするならば、本書から、実隆・公条（「追称父子」・宗祇等の説を除けば、実枝説乃至実枝の「管理してゐた」説が、ある程度は見えてくるのではないか。

その成否はさておき、実枝に伊勢学があつたことは確実で、注釈書の存在の可能性もかなり高いのではあるまいか。

【詠歌大概】

『詠歌大概』の注としては、宗祇のそれが名高いが、実隆のそれは伝はらない。尤も、伝実隆著といふ『詠歌大概音義』なる学書は存在するが、これは考察の対象から外すべき性格のものであらう。

公条の講釈の聞書としては、尊経閣文庫に蔵される『詠歌大概』を挙げる事が出来る。奥書のみを掲げると、

称名院内大臣

西殿ノコト 公条卿 聴書御息

三条帥大納言殿 御講尺之聞書也

下野佐 三河者

同聴者 周桂 宗牧 道由 孝清

宗右日向者

從「宗右」相伝之分書加者也

永祿九年閏七月十一日 正頼写之

連歌師に対してなされた講釈と覚しいが、年時は未だ考証しえてゐない。

実枝の講釈は、細川幽斎が天正14年（二五八）にまとめた、『詠歌大概抄』（寛文8年刊）が著名である。

【百人一首】

三条西家百人一首字については、赤瀬信吾氏「宗祇が都に帰る時——宗祇『百人一首抄』とその周辺——」（『説林』29＝昭56・2）の中で、資料の紹介とその分析がなされてをり、ほとんど追加の必要がない。赤瀬氏の紹介された資料を、一覧にすると次のやうになる。

【実隆】？

【公条】『百人一首聞書』（京大中院・京大國語国文研）

紹巴『百人一首抄』（島原松平）

【実枝】『幽斎抄』

九条植通『百人一首抄』（書院部）

【拾遺愚草】

『拾遺愚草』の本格的な研究は、常縁あたりから始まるのだらうが、実隆・公条にも注釈が残つてゐる。

【実隆】『拾遺愚草抄出聞書』（C類注）

【公条】『拾遺愚草不審』（以上二書とも、『拾遺愚草古注（上）』に所収）

* * *

以上見て来た注釈書・聞書の有無を、表にまとめてみる。

	源氏物語	伊勢物語	詠歌大概	百人一首	拾遺愚草	古今集
実隆	○	○	×	×	○	×
公条	○	○	○	○	○	×
実枝	○	○	○	○	×	○

『古今集』とともに、室町知識人の古典であつた『源語』『勢語』には、実隆・公条・実枝の三代にわたつて注釈書・聞書が残されてゐるにもかかはらず、『古今集』のみ、実枝の『伝必抄』（後述）しか見当たらないといふのは、どう考へても奇妙である。

そこで、先程示した方法(1)を次節以下で用ゐつつ、この問題の解明に向かふことにしよう。

三、『実隆公記』に見える古今集注釈書

本節では、方法(1)に至る前段階として、実隆の古今学の輪郭を探るために、『実隆公記』に見える『古今集』の注釈書をリスト・アップして置く。若干の考証も付すことにしたい。

【×古今集聞書】※「×」はその書名のものを掲載したことを意味する。

「宗祇法師入来、『古今集聞書』以下和哥相伝抄物等一合付封預置

之」。老生遠路旅行、再会難期之間、若無帰京之儀者、令「附属」之由、丁寧談之」（延徳3・4・29）「宗祇法師来、明日可下」向和泉境。七夕前可上洛云々。『古今聞書』預置之」（明応5・6・9）

「古今聞書」至「恋第五」披見之」（文亀元・10・15）「古今聞書」櫃一合、遣大慈庵文庫了」（同・同18）「肖柏入来、『古今聞書』被抄出之」（文亀3・9・25）（永正6・4・27）

【考】「古今聞書」といふ書名は、現在では『六巻抄』（定為、為世・行樂）のことを指す場合が多いのだが、最初の記事が宗祇から実隆へ古今伝受がなされてゐる時期と重なるし、肖柏が写してゐる点などを考慮に入れると、『面度聞書』のことと考へて良いと思はれる。

【古今夢庵聞書】

「真光院（尊海）茶十袋被持来、『古今夢庵聞書』不審所被尋之」（享禄2・5・28）

【考】夢庵とは肖柏のこと。この『古今夢庵聞書』は、肖柏が宗祇の講釈を聞書した『古聞』のことと思はれる。実隆が『古聞』を所持してゐた証拠は後述する。

【×古今（集）序聞書】

「宗祇法師来、『古今集序聞書』并三ヶ大事内切紙一、短哥事切紙一持来之」、密有「口伝子細」（長享3・3・3）「古今序聞書」（宗祇法師抄也）加「校合了」（延徳元・11・18）（同3・9・2）（同・同・8）

【考】これらを一括して扱つてよいものか、疑問は残るのだけれども、一応同じ書を指すと考へることにしたい。長享3年の記事は、宗祇から実隆への古今伝受がなされてゐる間のことであり、また、

延徳元年の記事に、「宗祇法師抄」とあるから、これらの序聞書は、『両度聞書』の内の仮名序・真名序注を指すと思はれる。事実、後述するやうに、『両度聞書』の仮名序注・真名序注は、単独で伝来するものも多く、三条西家にもそれらの（単独注）が伝来してゐた形跡があるから、まづ間違ひないだらう。

【×古今序注】

「古今序注」、可書之由、左府（徳大寺実淳）命也」（延徳2・7・28）（享禄元・9・12）

【考】少なくとも前者は、『両度聞書』の序注である蓋然性が高い。何故ならば、実隆に書写を依頼するといふことは、(1)実隆が所持してゐるか、(2)実隆ゆかりの書か、いづれかが背景にあると見ねばならず、そのいづれが正しいとしても、『両度聞書』が第一候補たりうるからである。

【古今大事】

「大館刑部大輔（尚氏）来、『古今大事』等令見之、不慮事也」（永正7・6・21）

【考】「古今大事」なる外題の古注は、『國書總目録』によると、東北大狩野・京大に蔵されてゐる。また、大江広貞注（爲相注）の一本（京都府立総合資料館蔵本）も「古今大事」と題する。「不慮」の内容は、二通りにしか考へられまい。

(1)尚氏が書物を見せるとは、全く意外だつた。
(2)尚氏はしばしば実隆に書物を見せてゐたが、今回の『古今大事』に関しては、まさかこのやうな書物（秘伝書）を見せられるとは、

全く意外だった。

尚氏と実隆との交流を考へれば、(2)を探るべきだらう。尤も、「等」の一字は見通すべきではないのだが。

【X古今注】

『古今注』校合於「御前」与「右衛門督」(四辻季経)「兩人沙汰之」(延徳2・4・21)「自伏見殿」『古今集』(三巻)被「借下之」、顕昭注也、遣令「見于宗祇法師了」(明応5・10・5)「古今注」(北畠准后抄)、宣賢朝臣借「送之」、珍重物也」(永正9・6・8)

《考》『顕昭注』『北畠親房注』といった、当時でも比較的著名だったろう古注に対しても、実隆たちが、深い関心を寄せてゐることに注目すべきである。つまり、彼等の所有しえた古注の「空間」は、我々が想像するほどは広くはないのではないか、と思はれるのだ。この問題は次節で別の資料によつて再び検討することにした。

【古今注秘抄】

「後成恩寺」(「一条兼良」所作『古今注秘抄』新写今日校合了」(永正7・8・25)

《考》兼良の古今集注釈書については、赤瀬信吾氏の「兼良の古今集注釈」(『國語學』昭56・11)に詳しい。氏の論によれば、

打聞 史料編纂所本) ↓ 童蒙抄(類従本) ↓ 秘抄(丙丁本)
といふ変貌が認められるといふ。

ところで、学習院大学文学部国文学研究室に三条西家旧蔵の歌書・物語(の一部)が収められてゐることは著名だが、その中に『古今集秘抄』(但し、登録書名は「顕注密勘」、整理番号九二・五〇〇二)が一部存す

る。この本は、古筆切としてかなりの部分が截断されてをり、(残闕本)とでも称すべきものである。赤瀬氏は伝兼良筆とされたが、書写は室町末期迄下ると見た方が妥当である。この本が上掲の記事でいふ『古今注秘抄』かとも思へるのだが、包紙に「二百ひき」とあり、三条西家でいつの頃か購入したものであることが分るから、イコールとは考へ難い。

一方、公条筆『古今集秘抄』を紹介されたのは、松田武夫氏であった。

三条西家に秘蔵される三条西公条の古今集秘抄は、古秘抄と題し、これ亦兼良本から書写された系統のもので、「古今集秘以相伝之秘説云々」の奥書のみを記してゐる。(『王朝和歌集の研究』七〇頁)

この公条本は、現在東海大学附属図書館桃園文庫に蔵される『古今和歌集秘抄』(整理番号一八九〇、一冊、池田龜鑑氏の「三条西公条筆古今集童蒙抄は古今集童蒙抄の最古の古写本なり」といふメモが付される由、「桃園文庫(和装本)目録」による)のことと思はれるが、これも実隆新写本ではなく、関係があるとしてもその転写本だらう。

従つて、『実隆公記』にいふ「実隆新写校合本」の行方は、依然杳として不明なわけだが、実隆が『古今集秘抄』の最も早い段階の享受者の一人であつたことは確実である。この事実は、実隆の古今学を考へる上で、参考になる。つまり、実隆に流れ込んだ古今学に、宗祇、ル、ト以外の道が確実に存在したことになるのである。

【僻案抄】

(永正2・5・3) (大永2・7・26)

以上の記事から考へるべき点が多いが、一点だけ述べると、『顕注密勘』『六巻抄』といった「一派古今学の〈古典〉」の名が、全く見えないことをどう解釈するか、といふ問題がある。

無論、『実隆公記』が実隆の全生涯にわたつて残つてゐるわけではないから、現在闕けてゐる巻々の中に、これらの書名が見えてゐたと考へることは出来よう。しかし、これほど多様な古注の名が散見されることを重んじるならば、やはり奇妙といはざるをえない。解決の妙案があるわけではないが、これは物理的要因例へば、実隆が本当に所持してゐなかつたのではなく、恐らく、なんらかの「選択」が日乗執筆にあたつてなされたのではないか、とも思ふのだが、想像以上の何ものでもない。

四、実条の蔵書

三条西実条は実枝の孫、公国の息。自筆の和歌懷紙・詠草が早稲田大学図書館にまゝとまつて現存する他、歌学書『三垂相座談』、『古今抄』(慶長19)等を残し、慶長・元和・寛永期の堂上歌人の代表的存在である。実条の歌学を知る上での恰好の資料に、宮内庁書陵部に蔵される『実条公遺稿』(柳・三三三)がある。同書は、上巻だけの残闕本ではあるが、その巻末に、実条の蔵書リストと覚しきものが添付されてをり、これを見ると、慶長期前後の三条西家の学問の総体が想像しうるのである。詳しくは、本論末尾にその部分の翻刻と解題を附しておいたので参照願ひたいが、『古今集』古注の書名は僅

かに、

◇細川幽齋に貸した分として 『顕注密勘』『古今集秘抄』

◇中院通勝に貸した分として 『古今抄』(伝心抄)

◇借り写すべき分として 『顕注密勘』

などが見えるだけである。やはりここにも、彼等の所有しえた古注の「空間」の相対的狭さが顔を覗かせてゐるのである。

以上、前節と本節とで、実隆と実条の古今学の外輪を見渡して来たのだが、その結果は、意外なことに、三条西家には『古今集』の注釈書が豊富に伝来してゐたとはとてもいへないことになりさうである。即ち、実隆にしろ公条にしろ彼等は、『中世古今集注釈書解題』の如き書物を座右に置くことは出来ず、多くは縁によつて手に入れた数少ない古注を矯めつ眇めつ眺めて、自らの古今学を形成して行つたのである。無論、宗祇から伝受された知識は十二分に活用しただらうが、それだけでは学たりえないことも事実である。この事情を我々は十分に認識すべきである。

五、実隆説の《影》

では、実隆の『古今集』に関する学説・批評等が残つてゐないのかといふと、さうでもないのである。第一に、実隆判の種々の歌合の判詞があげられるだらう。仮にこれを除外するとしても、なほ若干の《影》を指摘しうる。その一例として、実枝から幽齋に伝授された、三条西家古今学の集大成たる『伝心抄』に見える実隆説を見てみよう。

【伝心抄・秋下・二六四歌注】*書院部藏幽齋自筆本(五〇二・四二〇)

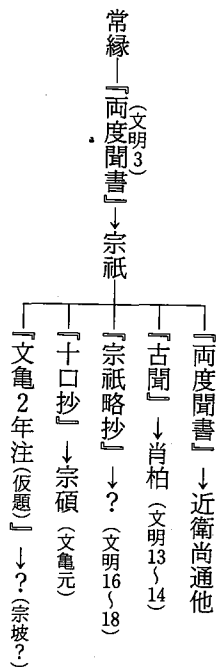
ちらねどもかねてぞおしき紅葉ばゝいまはかぎりの色とみへつれ

紅葉ガ染ツクセバ満足ナレドモ、サスレバ又チル程ニ、カネテゾオシキト云也。紅葉ノ散時分ニオシムハ勿論ノ事也。チラヌ已前ヨリオシム心面白ト也。逍遙院殿(美隆ナドモ、此哥ムスビ句面白ギ哥ナリト被レ仰シト也。

裏ノ説、十分ニミツレバ、必カクル物也。ソコヲ心ニカケヨト也。

(句読点・濁点・返点を私に付した。以下引用文同様)

ここに見える実隆説が、正しく実隆の説であり、宗祇や肖柏などのそれではないことを実証するため、宗祇流の古注と比較してみる。宗祇流古注の全体像は、片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題 三』に詳しいが、若干追補しつつ、概説して置くことにしよう。図示すれば次のやうになる。



『両度聞書』の成立・特質については、片桐氏前掲書の他、東香里氏『東常縁から宗祇への古今伝授の場所について』(『国文鶴見』昭49・

3)、金子金治郎氏『宗祇の生活と作品』(桜楓社・昭58・2)、石神秀美氏『原本「両度聞書」から板本「両度聞書」へ』(『三田園文』2・昭59・3)などに詳しいが、小論における引用は、尊経閣文庫蔵伝公条筆『古今集聞書』(一三・一六・書)を用ゐることにする。

該書は袋綴1冊本。加証奥書が次の如くある。

右一冊者、称名院右禪相府へ公条公

芳蹟也。云「抄出」云「筆跡」、握觥無二

比類一者乎。恨両三巻有「欠闕」、

不「全備」。今加州羽林(綱紀朝臣)依「所望」

貞享乙丑温風至之候、贅「其後」

秃筆、尤有「醜矣」。

特進源(花押)

「加州羽林(綱紀朝臣)」とは、加賀藩主前田綱紀(一六四三~一七二四)のこと。「特進源」とは正三位の源氏のこと、貞享2年春でこの条件に適するのは、千種有維・六条有和・愛宕通福の三人であるが、特定しえない。

さて「両三巻有「欠闕」とあるやうに、該書は残闕本である。仮名序・物名・巻20を闕く。真名序は写本系の『両度聞書』が通常闕くので、ここでは残闕とは認めない。この欠脱が、物理的な理由(例へば錯簡、脱落)によるものか、故意の削除(例へば、初めから書写されてゐなかつた)によるものか、俄には判断しにくいけれども、一応後者と考へて良いと思ふ。といふのは、該書は、巻の変り目では、

巻K(〜MT) 〇 巻K+1 巻(MT) 〇

巻L(〜NT) 〇 巻L+1 巻(NT) 〇

といふ原則が守られてゐるにもかかわらず、物名巻の前後の巻では、

巻L(〜76T) 〇 77T 巻=田巻 〇 78T 〇

となつてゐて、この原則が守られてゐない。意図的な省略を暗示してゐるのである。また、巻20に關しても、巻19が墨付の表で終つてゐるのだから、本来続いてゐたならば、その裏から始まつてゐるべきであるが、實際は裏は白紙であり、これも意図的な省略と見做しうる。仮名序は不明だが、物名と巻20に關しては、もともと存在しなかつた可能性が極めて高い。実は、この三巻を闕くことは、決して偶然でなく、三条西家古今学の一特色なのであり、該書が公条筆で万が一ないとしても(筆者は公条筆と見てゐる)、三条西家の誰かとだけはいひうると思ふ。

『古聞』だが、古くから善本として知られてゐる国会図書館蔵本(WA一六・一三一)を用ゐる。国会本の書誌は、『国立国会図書館蔵貴重書解題 第九巻 古写本の部第二』(昭53・8)に詳しい。同書によると室町末期写の由だが、首肯しうる。

『宗祇略抄』については、片桐氏『解題三』に詳細な論証がある。氏の論をまとめると、

(1)従来、『宗祇略抄』の唯一の伝本として知られて来た大阪府立中之島図書館蔵本は、巻10・20を欠脱してをり、更に巻18・19は実は『古聞』である。

(2)大阪府立図書館本と全く同じ構成の伝本が、河野信一記念文化館に二部蔵される。

(3)静嘉堂文庫蔵『十吟抄』の後半部(巻11)が、『宗祇略抄』と一致する。

(4)全巻が『宗祇略抄』であり、しかも完本であるものに、宮内庁書院部蔵『鉅訓和調集聞書』(二六六・一四五)がある。

(5)宗祇の講釈の聞書とされて来た根拠である巻19の奥書が『古聞』のそれであると判明した以上、講釈者を宗祇と考へるわけには行かないが、注内容を検討する限りでは、宗祇注に近似してゐることは確実である。

(5)説をもう一步押し進めて、小論では宗祇講釈の聞書と見たわけである。

筆者が追加しうる点は次の通り。

(6)『國書総目録』によると、飯田市立図書館にもう一本『略抄』が所蔵される由。但し未見。

(7)『鉅訓和調集聞書』の下巻(巻11)と同一の内容を持つ伝本に、東山御文庫蔵『鉅訓和調集聞書 月之上下』(勅六三・一・二・三、2冊)がある。

小論では書院部本を用ゐる。

『十口抄』の構成は複雑で、凡そ次のやうに整理されて来た。

本行注 〓 写本系『両度聞書』

頭注・傍注 〓 『古聞』

この整理で大体は良いのだが、然し、頭注・傍注の悉くが『古聞』と一致するわけではない。

さて宗碩の聞書としては『十口抄』のみが知られて来たのだが、

実は、宗碩自筆と目される全く構成の異なつた聞書が伝来する。それは、慶応義塾大学図書館に蔵される『宗碩聞書』である。該書は既に、阿部隆一氏「宗碩自筆古今和歌集聞書外古今伊勢古注釈書類（一）」（慶應義塾大学図書館月報）51（昭和34）に紹介されてゐる。従来ほとんど省みられてゐない紹介文なので、やや長文になるが、ほぼ全文を引用しておく。

古今和歌集聞書 宗祇講 宗碩筆録 宗碩写 2冊（二三×六二）

梨色地に金銀唐草文様の鳥の子表紙28・2×23種。左肩に蔦模様の題簽を貼附、標題の如く墨書。大和綴。見返しは梨色地紙に銀雲形に金砂子をまく。字面高さ約18・5種。毎半葉13行。注は約2字下げ。墨付上冊七七、下冊一〇八丁。巻頭に「古今和歌集聞書」と題し、次行に、

文龜元年辛酉六月七日巳刻始之同九月十八日令成就早／于時祇公老師八十二歳講尺二句餘而講之

と。巻末に次の奥書あり。

予此集伝受之儀於越後府中自然齋宗祇旅館／文龜元辛酉六月七日令始行同九月十八日終功訖

文龜元年九月 日

宗碩（花押）

後年又宗祇老聞書引合不審之所少々書改／之早

（中略）この宗祇自筆本を後年の写本たる次に掲げる「十口抄」等と比べると、後世の写本は、聞書その他のものを混入せしめてゐて、原形を失つてゐることは、次に記す通りである。

このやうに、宗祇流古注の主たる関心事項は「かぎりの色」にあり、その意味では実隆説と一脈通ずるといへなくもないが、少なくとも宗祇たちはその「表現価値」にまでは言及してゐないのである。同時代の古注として、四点のみを比較してみよう。それぞれ、学派を代表する注釈書である。

【冷泉家・持為抄】＊宮内庁書陵部蔵本（二六六・一五）

寛平の御時の御中分の御哥也。哥の面に不審なし。但京極更衣に御めぐみ浅くならせ給ふころなれば、七条后も今こそかくはあれども、つゐにはうつろひ給はんとおぼしめす御心をそへさせ給へるとなむ。

【冷泉派・古今私秘聞】＊「ノートルダム清心女子大学古典叢書」

本

ちらね共、ヤガテ程有マジキト也。

【飛鳥井家・蓮心院殿説古今集註】＊片桐氏「解題 四」所掲本

誠ちらぬも次第に色の過は、時節の限なればおしかるべき也。

【堯恵流・古今抄延五記】＊秋永一枝・田辺佳代氏「古今集延五記」

哥ノ心ハ紅葉ノチシホニナリツクシテ侍レバ、今ハチル事ヲ待斗也トヨメリ。

これだけの比較では断定はできないけれども、「ムスビ句面白キ哥ナリ」といふ実隆の批評は、（新たに、か、再び、かは留保すべきだが）実隆において始められたといひうるのではなからうか。

ここで問題点を二つ揭示しておきたい。

注は、「十口抄」に於る頭注・傍注のみを独立させたもの、といへばほぼ想像していただけたと思ふ。『月報』がいふ如く宗碩自筆かどうか、今一つ自信がないけれども、室町末期写の堂々たる善本たることは疑ひない。以下、「十口抄」といふ書名は廃し、『宗碩聞書』と改め、引用はこの慶応本によることにする。

なほ、慶応本は近刊の『斯道文庫論集』に、川上新一郎・石神秀美・平澤五郎氏によつて翻刻されるとの由である。

最後に『文龜2年注』だが、これは片桐氏がいはれるやうに、『両度聞書』の略注とでも称すべきものだから、小論では用ゐないことにする。

大分資料操作の手續き論に紙幅を割き回り道をしてしまつたが、次に先程引用した『伝心抄』と同じ歌注を、宗祇流古注と比較してみよう。

【両度聞書】

心はたゞみてるをかく心也。かぎりとは、色の千しほ也。

【古聞】

明也。今はかぎりの色とは、染つくしたるころの事也。

欠盈心をカクルミツル

思ふべきよし也。

【鉛訓和詞集聞書】

いまは限のとは、満くたる色なれば、ちらん事一定也。へみてるをかく理也。

【宗碩聞書】

心はみてるをかく心也。限とは、色の至極と云儀也。

その一つは、『伝心抄』で実隆の名が見えるのは、筆者の調査ではここ一箇所だけであるといふ点。

今一つは、後に詳述する東京大学文学部国語学研究室蔵『古今集聞書』（二二A・一七〇）に、同様の実隆説が見える点。しかも、同書においても、実隆の名が見えるのはこの一箇所だけといふ点。

心はみてるをかく心也。かぎりとは、色の千しほ也。（『両度聞書』）

／＼あはれむ心也。落句妙也。

〔行間小字書入注〕／＼秋ハモノ、カギリナレバ、チラヌサキヨリ紅葉ノオシマル、ト、色付ヲ見テイヘルニヤ。／＼一切十分二満ヌレバ、必ズ闕ル事ヲ心ニ以テ云ヘリ。／＼殊結句奇特之由、遺遙禪府之仰也。（『伝心抄』）

この二点は恐らく別々に考察されるべきではないのだから、現状では解決の糸口がない。今後の課題である。但し、東大本の性格については、後に考察することにする。

六、実隆説

①早稲田大学図書館蔵三条西家旧蔵「古今伝受書」

この伝受書については、既に以下の論考によつて考察がなされてゐる。

（1）井上宗雄・柴田光彦氏「早稲田大学図書館蔵三条西家旧蔵文学書目録」（『国文学研究』32（昭和40・12））

（2）小高道子氏「東常縁の古今伝受——伝受形式の成立——」（『和歌文学研究』44（昭和56・3））

(3) 柴田光彦氏「荻野研究室収集三条西実隆の書状をめぐって」(『早稲田大学図書館紀要』22・23 昭58・8)

特に(3)は詳細な考証と翻刻を付し、今後の基本的文献とならう。奥書は次の如し。

右宗祇法師伝受事等、為_レ輩卒爾候、蒙_レ

仰記_二付_一之。正本納_二函底_一、彼書状等又可_二

秘藏_一。此一巻、不_レ可_二他見_一者也。

永正第七二月十八日雨中記_レ之

柴田氏の論をまとめると、

①この伝受書は、もと一括りの反故紙であつた。

②『実隆公記』の記事、及び荻野研究室収集文書五九三・五九四号(『早稲田大学所蔵荻野研究室収集古文書集』所掲)などとの比較から、永正7年2月5日より18日までの間に、実隆が徳大寺実淳に書き与へたものの案文と考へられる。

となる。内容は、宮内庁書陵部に蔵される「当流切紙」(実校筆)とほぼ一致する。現存する宗祇流の切紙では、最も古いものの一つであらう。

ただ、本書を三条西家古今学の一つとして位置付けるのは、やや無理ではないかと思ふ。といふのは、この伝受書における実隆の位相は正確には「管理者」であつて、自身の「学」が入り込む余地はそれほど無いと思はれるからである。そこで、この資料は指摘に留めたい。

□□□□□(一両度聞書)／○○○○○(一古聞)《小字片仮名注》

となる。この《小字片仮名注》に石神氏は実隆説の投影を認めてゐるのである。

更に、日野本にはこれら三種類の注の他に、

④本行間朱筆注(同筆?)

⑤朱筆頭注(同筆と思はれるものも、別筆と見た方が自然なものもある)

の二種類を追加しうるのであり、日野本の注は多層構造をなしてゐるといへるだらう。石神氏は頭注をほとんど考察されなかつたので、落穂拾ひの観もあるのだが、頭注の出自を簡単に検討しておかう。

み山にはあられふるらしと山なるまさきのかつら色付にけり

(二〇七七)

心明也。九品の哥には、是を上品中生にたてたり。めでたき哥なるべし。(一両度聞書)

面白く殊勝なる哥とぞ。裏云、人の心、奥に悪心あるは、必外_二其色あらはる_一也。はつへき事也云々。天道の鑑のみならず、人の間にも如_レ此也。又天子治世之心、遠達までおもはかりしろしめすべき義也。(一古聞)

／善惡ともに此心也。(?)

〔頭注〕是ハ日吉ノ御哥也。深山は比叡山也。都ニ対スル深山也。外山ハ大内山ノ事也。霞ハ神トアラハレ給ト也。中道也。フルトハ、世ニ経ル也。マサキノカツラハ、御門御命長ク、知悉ノ色久シカレト也。

この頭注の最大の特色は、『古今集』では読人不知神遊びの歌とさ

②宮内庁書陵部蔵『古今集聞書』(日・五一)※以下日野本と呼ぶ。

この注釈書に関しては、既に『圖書寮典籍解題 續文學篇』に詳しい紹介がある。26・9×21・8cm、袋綴1冊。奥書が「永正十二年八月十一日書夜写終、堯空」とある。日野本を古注釈史の上に正しく位置付けたのが、石神秀美氏の「三条西実隆筆古今集聞書について——古今傳受以前の実隆——」(『三田園文』1 昭58・1)といふ卓論である。石神氏の論を摘記すると、

①「堯空」とは実隆の法号であるが、実隆が実際に出家したのは翌永正13年4月で、矛盾を来す。然し、既に芳賀幸四郎氏が指摘されてゐるやうに(『三条西実隆』七九頁、延徳3年4月29日に書写した『円頓戒法則』の奥書に「優婆塞堯空」との署名があり、訝かる必要はない。(武井曰、「優婆塞」トハ在俗ノママ仏道修行ヲスル者ノ謂也)

②内容は、仮名序注十卷10(物名)注十卷20注十浄弁作者部類十東家系図十《奥書》と整理出来る。

③「その注の部分」は、(中略)近衛尚通書写系統の「両度聞書」とほぼ同文の注文を先づかゝげ、第二に宗祇の肖柏に対する古今集講釈の集大成たる「古今和歌集古聞」を概ねそのまゝ写して増補し、第三に、小字の注文を添えるという構成をとる」

とならう。

なほ細かく日野本の原状を述べてみよう。
先づ注釈の形式だが、石神氏のいはれる通りなのだけでも、原則的な記述の仕方は、

れてゐるこの歌を、日吉の神詠だとしてゐる点であらう。

『古今集』の読人不知歌に作者を擬す方法(?)は、既に鎌倉期の注釈書である『毘沙門堂本古今集註』で試みられてゐる他、室町期に至るまで数点の注を残す。野中春水氏の先駆的業績「古今集読人不知考と古今無名作者抄」(『甲南大学文学会論集』32 昭41・12)によりつ、作者に擬されてゐる人名を調べてみると、次のやうになつた。

毘沙門堂本古今集註 平城天皇

堯智・古今集読人不知考 平城天皇

神宮文庫本古今無名作者抄 平城天皇

つまり、作者に擬されてゐるのは平城天皇だけなのである。日野本頭注が主張する日吉神詠説が《周縁》に位置する異説であつたらうことは、想像に難くない。

そもそも、読人不知歌に作者を擬すること自体、宗祇流の古注では異端の行為なのである。無論、宗祇として作者を擬することはまああるが(例へば三番歌)、それはあくまでも例外中の例外、日野本頭注の如く穿鑿を逞しうすることについては冷淡である。とすると日野本頭注は、二重の意味で《周縁》性を背負つてゐるといふことにならう。

頭注が実隆の筆になるものか、断定は出来ないけれども、墨跡から見て室町期のものと覚しく、しかも日野本はしばらく三条西家に所蔵されてゐたと考へるのが自然だらうから、頭注を付した某は、三条西家の人かあるいはそのごく近くにゐた人物だらう。つまり、この頭注を三条西家古今学が許容しえた、と考へて大きな間違ひはないだらうと思ふのである。

なほ、日野本の忠実な転写本が京都大学附属図書館中院文庫〔中院VI・五六〕に蔵される。寛文頃の写しと思はれる。

〔3〕慶応義塾大学附属研究所斯道文庫蔵『古今和歌集序等聞書』(〇九一・ト二七)

本書については、石神氏前掲論文に詳細な検討があるので、先づ概要を知るために、主要な論点を引用しておく。

①主に漢字片仮名交り文をもつて記されるその内容は、おもには仮名序・卷十物名・卷廿大歌所御歌等の注である。……

②日附とは、「文明六年中夏 廿〇」「同廿一日」「廿三日」「同廿四日」「同廿七日」である。

③この聞書と、『六卷抄』をつき合わせて仔細に比べてゆくならば、仮名序・物名の部に於てもそれに依拠していることは明白であるといえる。

④講述者は、仮名序・物名については自説をも交え、説話をより豊かに挿みなどしながら講じ、卷廿以下奥書までは自らの所持する拠りどころを貸し与えて写さしめたというようなおもむきである。

⑤その小字の注(武井曰、日野本ノ「小字片仮名注」ノ事也)が、斯道文庫の前掲『古今和歌集序等聞書』と、まさに一致しているのである。

⑥(日野本ノ筆跡ト)斯道文庫の聞書のそれとは、全く同一と認定し得るように思う。

⑦宗祇が、『両度聞書』はあまり表にたてず、『六卷抄』という、相対的には「うひまなび」向きの注釈に依拠し、聴手の興味をますますく喚起すべく説話的な要素も充分取り入れながら若年の聴聞者を前におこなった講釈の筆録が、掲出、斯道文庫蔵の聞書であろう……

⑧二十歳の篤学な実隆が種玉庵主宗祇のもとへ古今集の講釈を聴聞に出かける……場面を想定しても格別の不都合はないようである。

以上、要点のみを抜粋したが、ほぼ首肯しうる把握であるが、⑦に関しては若干の異論もなくはない。

『六卷抄』の性格を「うひまなび」と想定するが、これはいかがかと思はれる。『六卷抄』は、二条派古今学の基本文献であるとともに、堯惠流の人々(後柏原院・青蓮院尊成親王・尊親親王・鳥居小路経厚等)などもその説によつてゐることが確認されてゐるのだから、必ずしも初心者向きとは断言し難い。また、注釈の一方方法として用ゐられる説話を、「聴手の興味をますますく喚起すべく」挿入されたと思われることは、間違ひとはいへないけれども、説話挿入の意義をそれだけに限定するのはやや危険ではないか、と思ふのだ。

さて、斯道文庫は、実隆青年期(20歳)の聞書だといふことが確實になつた。一方、先程見た日野本は永正12年の書写(成立?)、時に実隆61歳、この間40余年余といふことになる。しかも、斯道文庫と日野本で注文が重なる部分が多いのだから、実隆の古今学が意外と早い時期に確立し、かつ長年にわたつて固定化され続けた、と結論し

うと思ふのである。この問題に深く立ち入ることは出来ないが、実隆論への一視点たりうらうらう。

〔4〕広島大学文学部国語学国文学研究室蔵『古今集真名序注仮題』(国文N二三四一)

該書以下広大本と呼ぶは、かつて一見しただけであり、以下の調査は写真版によるものである。

『弘文莊待買古書目』20(昭26)に、『古今集真名序註』として見える写本がある。同書目には「足利中期古写本 三条西家旧蔵 一冊 一二〇〇円 美濃判より一まはり大形本、三条西実隆の筆と見ゆ。墨付十三葉精写、老子・孟子・文選等を引用せり」とある。この本が正しく広大本である。小論にとつて重要なことは、広大本が三条西家旧蔵でしかも実隆筆と鑑定されてゐる点であらう。即ち、日野本のツレではなからうか、と一応疑つてみる価値のある写本だといふことだ。

内容を今少し詳しく紹介すると、巻頭に「長恨歌伝」「老子」「孟子」「毛詩」の引用が半葉分あり、その次に紀家系図(長谷雄時文清正がまた半葉分、以下真名序注があり、最後の1葉分が「周礼」「文選」「金剛經天台尺」「白氏文集」の引用である。これら漢籍の引用は、真名序の注釈の補遺となされたものだらう。真名序注の内容は大略板本系『両度聞書』の注と同一だが、ままた独自の注も見られる。その典型として、冒頭の注を見てみよう。

(a)真名序、二条家ニハ無「口伝」。其故ハ、貫之雖「用」意之「不」

奏覽三故也。此淑望トマ、二名字ヲ載ル事不審也。文選李善表、

攀「中葉之詞林」。菅御注、中葉斥班固以?也。葉世也。詞林猶字也。無「更改」也。(↑?)

(b)夫和歌者……詞林者也(↑真名序)

(c)夫トハ発言ノ詞也。其事を云出さんといふ心也。和ハ国也。此国の心也。歌トハことわざ也。根トハ根源也。心地トハ心の底、心のはだへ也。言ハ眼耳鼻舌身ニしる所ハ、心のはだへに付る也。心地と云によくもとづくべし。其根とは、元来の無也。無ハ是さへても性也。自性の源ハあらはれず。是を物に託する所を、哥とは云也。発其花於詞林とは、題かたき自性の心をもあらはす心也。是、哥の大底を云也。(↑両度聞書)

(d)哥ヨムベキ心モチイラ云也。数ナラヌ童謡ナドマデモ、分ノ本性、此哥ナラデハアラハレザル也。(↑?)

(e)(以下頭注)老子經、玄牝之門階、天地之根、注根ハ元也。

(f)梵網經心地戒品、天台尺、三業之中ニハ、意業□為「主ト」。(以下略)

(g)杜願曉第一義、廻向心地初。

(a)(d)(e)(f)(g)の部分は、広大本の独自の注で、『両度聞書』『古聞』『鉛訓和讃集聞書』『宗碩聞書』といった宗祇流古注には見えないのだが、『伝心抄』には類似した注が見える。

①此真名序ヲ二条家ニ賞セザルハ、無「奏覽」問用問敷ト云。(↑a)②ソレニヨリテハシニ有ベキ序ナレドモ如レ此。サレドモ捨ガタクテ、奥書ノヤウニノセタル也。夫ト云ハ発端ノ詞也。夫ハ語

ノ端ト注シタリ。其根ト云ハ初ト云義也。

③老子経ニ、根ヲ始ト読セタリ。根ハ元ナリト注。(↑e)

④心地ト云ハ、大日経ニテハ住心品アリ。

⑤梵網経ニハ、心地戒品ト云。身口意、三業ノ中ニハ、意業ヲ為ニ

主人ニ故、心地戒品ト云。(以下略、↑d)

⑥……詞ノ林ハ無ニ変改一也。(原文改行、↑a?)

⑦文選ニ、^{トツテ}中葉葉詞詞林林^ノ樹^ノ千秋筆^ノ海海^ノ。(↑a)

このやうに、『伝心抄』の注の過半は既に広大本に見えるものである。といふことは、広大本を奥書・識語等が全く無いにもかかわらず、三条西家古今学の一つに位置付けることが可能になったことになる。

先程の疑問、日野本との関係も、

*三条西家旧蔵でしかも実隆筆と鑑定されてゐること。

*寸法が美濃判(約27×19・5cm)より一まはり大きいとの由だから、

日野本の寸法(26・9×21・8cm)とほとんど矛盾しない。

*注の形式が、『両度聞書』+独自の注(小字片仮名)と、日野本と一致する。『古聞』の真名序注は『両度聞書』と同じだから、省略されうる

*独自の注が、『伝心抄』と多く一致する。

の四点から見て、ツレと見做して良からう。

⑤東京大学文学部国語学研究室蔵『古今集聞書(仮題)』(二二A・一七〇)

書誌は、27・6×21・8cm。袋綴3冊。墨付、第一冊七六丁、第

二冊六三丁、第三冊四七丁で、計一八六丁。奥書・識語等は一切ない。一面16×18行。室町末期写。『弘文荘待賢古書目』24(昭29・6)

に、『古今集講説聞書 足利末期写三条西家旧蔵 三冊 五〇〇〇円

美濃判より少し幅広の大形、袋綴、十六行。講義の筆記は平仮名交

り、その後の註記と覚しきものは片仮名交り。全巻の詳注で、講者

の名、筆者の名も不明だが、肖柏か、三条西家の人の講義で、筆者

は三条西公条又はその子の実澄あたりかと思はれる。墨付百八十六

枚、共紙表紙」と見えるものだらう。この東大本もまた三条西家旧

蔵であり、寸法も美濃判よりやや大きい点、更に横の寸法が21・8

cmと、日野本のそれと全く一致する点、注の形式の類似、などから

見て、日野本・広大本のツレではないかと想像されるのである。

果たして東大本の内容は、

巻1〜巻9(春上ノ巻旅……第一冊

巻11〜巻16(恋上ノ哀傷……第二冊

巻17〜巻19(難上ノ難……第三冊

となつてをり、正しく日野本・広大本の〈闕〉を補ふものであつた。

即ちこの三部の古注を合はせるならば、

日野本 仮名序・巻10(物名・巻20(天歌所御歌等

広大本 真名序

東大本 巻1〜巻9・巻11〜巻19

と、見事に『古今集』全巻の注釈書が完成するのである。では、東大本をこの体系の中に組み込んで間違ひはないか、検討してみよう。

その内容だが、日野本と構成的には全く一致する。つまり、

A『両度聞書』+B『古聞』+C『小字片仮名注』

といふ構成で、Cの部分が例によつて出自不明のものである。一例として、春上の五番歌「梅がえにきゐる鶯春かけて鳴けどもいまだ雪はふりつゝ」の注を見てみよう。

東大本聞書	宗祇流古注
〈A〉 きゐるはなるゝ也。／春かけては春になりて也。心は鶯と雪とを興じ愛する也。	〈両度聞書〉 きゐるはなるゝ義也。春かけては春になりて也。心は鶯と雪とを興じ愛する也。
〈B〉 ／かけてとは、両方かけたる事をよめる哥もあり。此哥は隔句にみるべし。梅がえに鶯なけども、いまだ春かけて雪はふりつゝといへる也。畢竟は、梅雪鶯の三を愛したる心あり。	〈古聞〉 ／きゐる鶯とは、梅になれたるさま也。／春かけてとは、春になりて也。両方かけたる事をかけてとよめる哥もあり。／此哥は隔句にみるべし。梅がえに鶯なけども、いまだ春かけて雪はふりつゝといへる心也。／畢竟は、梅雪鶯の三をいづれも愛したる心あり。

〈C〉

キ井ル、他流ハ木居、当流は来居、春カケテハ春ニナリテ也。

定家云ク、カケテト云ラバ、成テト心得ヨト堅ク云ヒ定メタレドモ、又兼対ノ心ノ処モアル也。

／イトハ最ト云字ニアラズトアレドモ、イトセメテハ最也。

定家ノ心ハ、イトナカルラント云詞ヲイトマナキト心エツメサセントテ、云ツメタル心也。春カケテヲ兼対ト心得ル処モアリ。

鶯ハナケドモ、余寒甚キ也。キ井ルハタツサハル也。

〔頭注〕〇いとト云詞事。

問題のCの部分だが、『伝心抄』に一致する注が見えるところから、日野本・広大本と同様、三条西家古今学の投影をそこに認めて良いだらう。

「小字片仮名注」の出自をもう少し細かく検討してみよう。

(1)正月三日ト常縁ニ相伝セラル。堯孝、平田ニ相伝之時ハ、正トヨマル、也。(春上・八・詞書)

堯孝が常縁に声句を相伝した時には、「正月三日」を「ムツキミカ」と訓読みにし、平田（未詳、猶後述）に相伝した時には、「シヤウガツ（サニチ？ミカ）」と音読みにした、といふ説である。

実は堯孝といふ事実上二条派の祖たる人物に、『古今集』の注釈書が残されてゐないのである。これまた非常に不思議なことで、あるいは単に調査の不徹底ゆゑかもしれない。しかし、注釈書とは厳密にいへないけれども、二種の「注」が残つてゐる。

【堯孝？・古今集聞書】*天理図書館蔵本（九一一・二三・イ

一〇一）

正月三日（右傍に「文字ノマ、ニ不レ説」、左傍に「ムツキミカトヨムヘシ」とあり）

結果として、堯孝説は「ムツキミカ」なのだが、天理本と尊経閣本では、『異説』の把握が異なつてゐる。即ち、

天理本 ムツキミカ↑ムツキミカノヒ
尊経閣本 ムツキミカ↑シヤウガツ？（文字のまま）

と整理出来るのだが、これは堯孝自身の「揺れ」とも、堯孝と堯恵の間での「揺れ」とも解しうるが、堯恵が藤原憲輔に伝授した『古今抄延五記』には、「正月三日 ミカノ日トヨムハ非ニ当流」（天理図

平田墨梅の伝に於て我々の知りうる事柄は誠に寥々たるものであるが、最も詳しい論に山本登朗氏「周辺の宗祇流——天理図書館蔵伝平田墨梅筆伊勢物語聞書をめぐって——」（光華女子大学光華女子短期大学研究紀要）18（昭55・12）がある。山本氏によると、天理本聞書には、古筆家神田道徳から奥野保悟にあてた書状が添へられてをり、その中に「一、いせ物語、平田墨梅筆、飛鳥井榮雅御門弟」と記されてをり、更に、『名家名号箋』（文政6年）「本朝古今新增書画便覧」（文久2年）には「平田墨梅（文明年中の人、号は一塵、一字名は重または久）」と見える由である。両方の記事、いづれも近世のものでどこまで信用出来るか問題は残るが、仮にこれらの記事を信用するならば、東大本に見える「平田」に、この平田墨梅を擬しても、大きな誤りではないと思ふ。尤も、飛鳥井家の門弟に宗祇が古今説を伝授しうるかといった、詰めなければならぬ問題は依然残るけれども、一応小論では墨梅説をとることにしたい。

とすると、『小字片仮名注』の担つてゐる「世界」は、宗祇周辺にまで及ぶかなり広いものであつたことが推量されるのである。因に、『小字片仮名注』に引かれる人々は、

堯孝・常縁・宗祇・円雅（堯孝ノ弟）

などである。特に、堯孝説を多く引く点は注目すべきで、現在まともつては伝はらない堯孝の古今説を復元する為にも、東大本は貴重な証言を提供しよう。

なほ、『小字片仮名注』は「山や今帰りて初子郭公」を宗祇の発句を引用してゐるが、この句は正しく宗祇の句集『老葉』（吉川本）に見

書館蔵堯恵自筆本と堯孝説がきちんと保存されてゐるので、前者と考へるべきかと思はれる。

以上、堯孝・堯恵師弟の説を確認して来たわけだが、確かに彼等は「ムツキミカ」説を（強く且他家の異説を意識しつつ）主張してゐるのだが、『小字片仮名注』がいふ平田云々はどこにも見えないのである。

次に、同時代の「他家説」を見てみよう。

【冷泉家・持為抄】

声句ニ関スル注ナシ。

【冷泉流・古今私秘聞】

正月三日

※なほ、同じく冷泉流の代表的古注である『為相注（大江広貞注）』には声句がない（京大本）。

【飛鳥井家・蓮心院殿説古今集註】

声句ニ関スル注ナシ。

なほ、諸家の説を広く収載してゐる平松家本『古今集抄』には「正月三日とあるを、たゞ『みか』とよむ也」と見え、これは「正月三日」全体を「みか」と読む説だらうから、また別の見方である。

ともかく、音読みを主張してゐる説は、主な歌道家およびその周辺にはないやうである。とすると、この『小字片仮名注』はどこから来たのだらうか。

最後に堯孝から伝授された「平田」某について、考へうる点を記して置く。この「平田」は恐らく「姓」だらうが、当時文事に関与した「平田」某は、寡聞にして平田墨梅一人しか思ひつかない。

え、注者を実隆とする小論の立場を補強するものといへよう。両者の連歌を通じての交友を想起すれば、いかにもありうることである。

(2)霞ノ色く二見エツルハ、花ノ初・中・後ニアル色也。案ジタル哥也。建保・建仁ノ哥ハ、大半是ヨリ出タリ。（春下・一〇二）

注釈対象である古典作品の理解の一助として、新古今時代の作品を重ねるといふ方法は、何も実隆において始まつたわけではない。

実隆も確実に熟読したと思はれる一条兼良の『花鳥余情』に既に、29ほかの散なむとやをしへられたりけん、古今哥に「ほかの散なん後ぞさかまし」とよめるは、花にいひをしへたる心なれば、哥の詞になき事をも心をとりにてかくかけるなり。定家卿の哥は、おほくはこの物がたりよりいでたりとみえ侍り。（花宴）

といふ表現が見える。しかし、建保・建仁期の新古今歌人達の作歌の源泉を、『古今集』の中から具体的に指摘する、といった方法は余り類を見ないのではないか。念を押すと、東大本はいふまでもなく『古今集』の注釈書であつて、『新古今集』の注釈書ではないのである。

気が付いた範囲で報告すれば、「建保・建仁」といふ指摘は他に、三一九・三二五・三四一・九一六番歌に見られる。

周知のことではあるが、建仁期とは、後鳥羽院歌壇がほぼ活動を休止する時期にあたり、建保期とは、順徳院歌壇が活動を開始する時期に重なる。しかし、この事実、藤平春男氏が戦後論証するまでは、学界でも周知の事実ではなかつたのだから、実隆のこの歴史把握は驚嘆すべきものといへるかもしれない。

なほ、「建保・建仁」といふ捉へ方は、宗祇流古注には管見の限りでは見当らなかつた。
では「建保・建仁」といふ捉へ方が実隆において始まつたのかといふと、どうもさうではないらしい。

【東家伝受書・詠歌口伝書類(仮題)】*鶴見大学附属図書館蔵本
〔百人一首ノ切紙〕

……此巻頭ハ、上・中・下ノ世ニ叶哥也。人ニ是ヲ心カケヨムベシ。巻軸ノ哥ハ、建保・建仁ノ比ヨリ用ト云ヘドモ、上古モアリ。仮令、近日人ニ是ヲ用テ巻頭ノ鉢ヲ可レ知者也。

該書は、井上宗雄氏「室町期和歌資料の翻刻と解説」——〔堯尋三十三回忌追善和歌〕・日吉社壇詠二十一首和歌・和歌秘伝書・古今和歌東家極秘——〔調査研究報告書〕6(昭59・3)によると、江戸極初期の写しで、東家流(素純流)並びに宗祇流などの切紙を中心に、安土桃山時代から江戸初期までの間に成立した秘伝書である。この切紙が何流で何時頃のものか、判然としないのが残念だが、所謂「当流切紙」宗祇流古今伝受の基本〕及びその周辺の切紙と比較して、その偏差を見てみよう。はほ、小論の立場を鑑み、当流切紙は前掲の「古今伝受書」を用ゐる。

【古今伝受書・百人一首】

正直
始終哥、古今ノサマハアレド、

玄之玄、同ノ之賦。在二口伝。

巻頭哥ト二神御哥。

正直
二神御哥ト天地未分。

【実枝伝幽齋受伝心集・道(四重)】*筑波大学中央図書館蔵本
百人一首 始終歌、古今ノサマハアレ共、玄之玄ハ同ノ之也。
但、其実落テ花ヤ多分ニ侍ラン。二神ノ御歌ト巻頭ト同前。天
地未分ト二神御歌ト同前。

このやうに、宗祇流切紙とは相当に距離のあることが確かめられた。

以上、「建保・建仁」といふ把握は、実隆のオリジナルだとは断言出来ないけれども、少なくとも宗祇経由のものとはいひにくい、とは思ふ。

もう一点追加すると、実は「伝心抄」がこの「建保・建仁」といふ把握をかなり忠実に継承してをり、その意味で「三条西家古今学」の一要素とはいへるだらう。

(3) 具体的な例示は省略するが、「裏説」の徹底的な敷衍が見られる。「裏説」は宗祇の古今学の大きな柱で、「両度聞書」でほぼ確立し、「古聞」「宗祇聞書」などで深化して行くのだが、「小字片仮名注」は更に一步推し進めてゐる。この側面は、宗祇の良き継承者と位置付けることが可能である。

以上長々と東大本を検討して来たわけだが、どらやら、日野本・広大本・東大本をワンセットのものと結論付けて、不都合はあまりないやうである。

ところで、さうすると、仮名序・真名序が独立してゐるのはまだ分かるとしても、何ゆゑ物名と巻20が本体から離れて独立してゐるのか、この問題が気になるところである。実は、物名と巻20を特別

の巻と見る認識は、既に宗祇において確立してゐたと覺しいのである。

そのことを鮮やかに物語るのが、「古聞」の形態とその注自身である。

先づ形態を見ると、比較的原態を保存してゐると思はれる国会本についていへば、

- 第1冊 春上・春下・夏・秋上・秋下・冬
- 第2冊 賀・離別・羈旅
- 第3冊 恋一ノ恋五
- 第4冊 哀傷・雑上・雑下・雑鉢
- 第5冊 物名・大哥所御哥・真名序
- 第6冊 仮名序

となつてゐて、やはり物名と巻20は別格扱ひなのである。そのことは、注を見れば一層確実になる。

〔物名〕

物名とは万物之名也。(略)第十二をける事も心あり。此部を執する義也。第一は最初、勿論也。第十も一段之処也。第十一も、恋は万物のはじめなる義なるによて、一段の部也。第二十巻、又一段也。

〔巻20〕

此巻は一段有子細也。十九巻雑鉢も、余集二ハかはれり。殊此巻は王道神道を兼てあみたる也。

今一つ状況証拠を追加すれば、「鉆訓和詞集聞書」に記されてゐる

講釈の次第である。片桐氏の整理によると、

文明16年12月6日(文明17年5月20日) 巻1ノ巻9・巻11ノ巻19
文明18年2月8日・10日 巻10(「物名」)

？ 巻20

となるといふ。ここでも、物名は確実に別格、講釈は9ヶ月の間隔を置いて再開されたのである。巻20のみ日付がないのは、書陵部本・東山御文庫本ともにさうだから、単なる誤脱などではなく、本質に關する事柄と解すべきであらう。

七、公 条 説

実隆の古今説は、それでも従来から調査・研究されて来たが、公条説に關しては、全くといつて良い程言及されて来なかつた。然し、ここに、甚だ零細なものではあるが、二点の資料を提示しよう。

〔1〕学習院大学文学部国文学研究室蔵三条西家旧蔵「古今集注(仮題)」該書(以下、学習院本と呼ぶ)は、これまで管見の限りでは全く紹介されたことのない資料と思はれるので、書誌を比較的細かく報告しておく。

27・4×21・4 cm。袋綴1冊。こげ茶色無地の表紙。外題・題簽・内題等無し。墨付一二六丁。大永4年公条写。

〔奥書〕

余頃三余之内、一夜之暇九月一日夜始レ之。夜々抄レ之、聊披二頭注密勘「勘見之」。依二勘之義ノ鈔レ之。并僻案抄加「載之」了。凡京極黃門本意、在此兩抄一者乎。蓋無二黃門之説一乎。

知「素鵲之深」乎。此内墨点「編」仮名「義并於」声者、或秘抄之義也。序之注、又一向彼抄義而已。敢莫「出」閨外一矣。于時大永四年臘月十八日抄了 都督朗花押「公条」

《注》◇三余——勉強に利用すべき三つの余暇。年の余りの冬、日の余りの夜、時の余りの雨降り。ここでは夜の意。◇素鵲之深——義未詳。◇大永四年臘月十八日——『実隆公記』は、大永4年12月記が關脱してゐて確認しえないが、公条が抄出を始めた9月1日条には「入」夜師父子（「公条実枝 参内。御祝如」例云々）と見える。また、この間の「実隆公記」に、学習院本のことを指すと思はれる記事はない。

この奥書から推定しうる点を箇条書にしてみると、

- ①公条は大永4年9月1日の夜から、古今集古注の抄出を始めた。
- ②その作業は、12月18日に終了し、奥書を記した。
- ③抄出の対象たる古注には、一つに「頭注密勘」があつた。特に、密勘説（「定家説」を主に抄出した）。
- ④更に、定家の「僻案抄」を抄出した。
- ⑤この両抄を何ゆゑ用ゐたかといふと、定家の「本意」が籠められてゐるからである。
- ⑥墨書した仮名の注（？）と声点は、「或秘抄」（後述）によつた。
- ⑦序注も全て「或秘抄」によつた。
- ⑧この書は、決して三条西家の外へ出してはいけけない。となる。当然問題になるのは、「或秘抄」とは何か、といふことだが、結論を先にいへば、これは「六卷抄」（定為・為世・行乘）のことである。

あつた。従つて、学習院本の注の構成は大略、
D「頭注密勘」（特に密勘）+E「僻案抄」+F「六卷抄」とまとめることが出来る。

では実際に、注文を比較してみよう。例は、春上二番歌（袖ひちてむすびし水のこほれるを）である。

学 習 院 本	頭注密勘・僻案抄・六卷抄
〈F〉・小字 万葉二ハ濱ト云。ムスビシハ、酌ナド云心也。	《六卷抄・小字》*東山御文庫蔵本 万葉二ハ濱ト云。ムスビシハ、酌ナド云心也。
〈D〉 頭、袖ひちてとは、袖ひたるといふ。むすびし水とは、手してすくひあぐるをいふ。水をむすぶ袖をひたさねど、せめてなづさふ心也。春立つ春立けふの風やとくらんは、「月令」に、「立春の日、東風解凍」といへる心也。	《頭注密勘》*歌学大系本 袖ひちてとは、袖ひたるを云。結びし水とは、手してすくひあぐるを云。水をむすぶ袖をひたさねど、せめて水になづさふ心也。春立つけふの風やとくらんとは、月令に立春の日、東風解凍といへる心也。（頭注）
／勘云、此哥の心、ことにこまれる所なし。不可有「自他之説」。	此歌の心ことにこまれる所なし。不可有「自他之説」。（密勘）

〈E〉

僻云、ひちてとは、ひたしてといふ心也。此詞、昔の人、このみてよみけるにや。『古今』にはおほくみゆ。『後撰』にはひとつふたつあるにや。今の世の哥にはよむべからずとぞ、いましめられし。

〈F〉

／『古来風鉢抄』にもいましめられたり。

《僻案抄》*群書類従本（再稿本）

ひちてはひたしてといふ心也。此詞むかしの人のみけるにや。古今にはおほく見ゆ。後撰にはひとつふたつあるにや。今の世の歌にはよむべからずとぞいましめられし。

《六卷抄・小字》

／『古来風鉢抄』ニモイマシメラレタリ。

なほ、学習院本が用ゐた「僻案抄」は、上にも注記したやうに、再稿本系統のものであつたらしい。初稿本では「後撰には、すくなし」（歌学大系）となつてゐる。

さて、以上のことが確認されたからといつて、学習院本の価値を判定するわけにはいかないのである。といふのも、学習院本には多くの頭注が同筆で付されてゐて、この出自を考察しなければならぬからである。この頭注のことは、前掲の奥書には全く記されてゐなかつたので、大永4年12月以降に追加されたものと見て誤りあるまい。ここでも結論を先に記すと、この頭注の大半は「浄弁注」であつた。頭注が比較的長文にわたる例をあげておく。

はちす葉のにこりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

〈夏・一六五〉

〈D〉あざむくとは、あざける心也。あざわらふと云も、あざけりわらふ也。にこりにしまぬ心と云は、蓮は泥の中より出て、泥にしまぬ物なれば云也。／勘云、あざむく・嘲、おなじさまの事なれど、各其字侍れば、ひとつ事には侍らじ。嘲はあざわらひ、あざむくはいつはりすかしだばかる心にて侍べき。書籍も、つかひならひたる詞も、すこしかはり侍らん。

〈F〉／法華経二、不染三世間法、如蓮華在水。／あざむくは、愛心也。

〔頭注〕

あざむく、嘲哂にあらず。嘲は、人をあざけりそねむ心也。是は、蓮のごとく、泥にもけがされぬ程の心もちながら、など露を玉とはいつはり思ふと云也。偽と云事、必しも人にそへごとを云許にはあらず。ひが目をもみ、ひがおぼえなどしたるも、偽をはなれぬ也。又説、蓮花は、泥にもけがされぬ程の心もちて、など露を玉のやうにもてなして、人をばすかすと云也。

【浄弁注】*天理図書館蔵「故金臂中」（九一・二三・イ一二五）あざむく、嘲哂にはあらず。嘲は、人をあざけるそねむ心なり。これは、蓮のごとく、泥にもけがされぬ程の心もちながら、など露を玉とはいつはりおもふと云也。偽といふこと、かならずしも人にそへごとをいふばかりにはあらず。ひが目をも見、ひがおぼえなどしたるも、いつはりをはなれぬ事也。又説、蓮花は、泥にもけがされぬほどの心もちて、など露を玉のやう

にもてなして、人をばすかすといふなり。

一箇所の異同を除いて、全くの同文である。これほど一致する例もかへつて珍しいと思ふのだが、それには理由がある。即ち、公条が用ゐた浄弁注の写本が、この天理本に他ならないと思はれるからである。『弘文莊待賈古書目』20によると、天理本は三条西家旧蔵で、しかも外題は実隆筆と鑑定されてゐる。小論の筆者が見る限りでは、本文も、実隆・公条いづれかの筆になる。以上の理由によるのだが、天理本には同じ浄弁注の一本である書院部本が持つ浄弁の奥書がなく、これだけでは「浄弁注」なのかどうか分からないので、公条が「浄弁」注と認識しつつ引用したかどうかは、猶未詳である。尤も、日野本に浄弁作者部類（浄弁の識語を伴ふ）が引用されてをり、公条がこの古注が浄弁の手になるものだといふことを知つてゐた可能性は残る。

これで頭注の出自が明らかになつたのだが、頭注で浄弁注でないものが、極少数ではあるが存在する。この出自を考へねばなるまい。その一例、

かはせうえう（秋上・一七〇詞書）

毛詩第十一白駒篇、「所^イ謂、伊人於焉^イ逍遙」。注、今於何遊息乎。思之甚也。新注、逍遙遊息也。（出典、毛詩・小雅鴻雁・白駒）

この「逍遙」の語義・出典については、古来様々な説があつた。倉卒の調査ではあるが、その整理を次に掲げる。

(1) コノ詞書ノ注無シ

教長注・頭昭注・頭注密勘・僻案抄・明疑抄・北畠親房注・天

書に直接の引用関係はないだろうが、参考までに『古今私秘聞』の關係する部分を見てみよう。

逍遙ハ毛詩ノ大鵬ノ古書ヨリ起レリ。

ところが、この大鵬云々はよく知られる通り「莊子」が出典、これも実際は無関係とすべきものであつたのである。然し、兼載たちの周辺には、たとへ誤解にせよ、逍遙と「毛詩」を結びつける学的（？）背景があつたのは事実で、このことは無視すべきではない。

なほ、逍遙なる語は、『伊勢物語』にも2例見え、この頭注が、勢語古注経由ではないか、との疑ひも当然湧いて来るのだが、筆者の調べた限りでは、『冷泉家流伊勢物語抄』が「鷹司本古今抄」と同じく『古語拾遺』等を引き、「愚見抄」が簡単な語義を施してゐる程度で、出典に触れてゐるものはなかつた。

とすると、この頭注は、ある古注の引用ではなく、公条自身の学的所産ではないだろうか、と考へられて来る。その状況証拠ならなくもない。

公条の毛詩学の師匠は、当代随一の大儒清原宣賢である。公条が宣賢から「毛詩」の講釈を初めて受けたのは、永正元年4月5日のことである。「招少納言宣賢」。中将（公条）読書（毛詩）、連々雖「心中」、自然懈怠、今日吉曜之間始レ之（「実隆公記」同日条）。そして講釈は、翌永正2年7月4日まで一年余続いた。その「密度」を察するべきである。

宣賢の「毛詩」講釈は、足利衍述氏「鎌倉室町時代之儒教」によると、伝箋による古点に正義・新注を加へたものであつたといふ。

理本耕雲注・内閣本伝冬良注・初雁本古今口伝秘抄・東山御文庫本永正25年伝常縁聞書・慶応本明応7年注・古今集董蒙抄・古今集秘抄・兩度聞書・古聞・十口抄・慶応本宗碩聞書・築瀬本古今聞書・大倉精神文化研究所本古今集聞書・静嘉堂本十吟抄・書院部本冷泉持為注・蓮心院殿説古今集註

(2) 注アルモ漢籍ヲ引カズ

三秘抄・初雁本為家抄・中院本古今秘註抄・為相注・浄弁注・初雁本古今和調集注・書院部本四辻家伝破窓不出書・天理本堯孝伝古今集聞書・書院部本鈔訓和調集聞書（宗祇略抄）・尊経閣文庫本堯恵自筆古今声句相伝聞書・内閣本古今集抄・東大國語研本古今集聞書・広大本為和注・古今抄延五記・永正記（教端抄）所引・平松家本古今集抄

(3) 古語拾遺・長能記等

鷹司本古今抄（弘安10年古今集歌注・佐賀県立本古今集聞書・書院部本「古今和歌集切紙伝授」〔五〇一・四四五〕所収「古今和歌集智囊」（慶長2年三条西実条判）

(4) 文選……毘沙門堂本古今集註

(5) 弘決（？）……六卷抄・伝心抄

(6) 毛詩……古今私秘聞・伝心抄

即ち、「毛詩」を出典として引くものは、僅か二書に過ぎないことになる。しかも、「伝心抄」は、明らかに学習院本より後の成立だから、ほぼ同時代に成立したと思はれる「古今私秘聞」とのみ一致するのである。公条が「古今私秘聞」を見えたとは思へないので、両

この形式は、頭注が古注・新注を対照させて引用する形式と一致する。宣賢は「毛詩抄」の中では、「アワレイラシメカシト思ヘドモコヌホドニ、思ヤツテイキ処ヲダニモシラヌヨ。ドコニカ逍遙セラル、ラウゾ。伊人ハ賢人ヲ指ゾ」（古活字本・第7冊12丁表と、逍遙の語義には全く触れないが、これは「毛詩抄」といふ注釈書の性格によるもので、恐らく公条に取する講釈の場では、古注・新注の比較・検討などがなされたであろう。

つまりこの頭注、公条その人の手になるものである可能性が高いのである。学習院本は、その大半が古注集成であるが、公条説を極一部ながら伝へる、貴重な資料といふことが出来るよう。

〔2〕宮内庁書院部蔵「古今集真名序注（仮題）」（五〇九・三九）

この資料は、公条の注ではなく、『兩度聞書』の真名序注の転写本であるが、公条に関する資料が極めて少ないので、参考までに紹介する。寸法は、24・8×21・5 cm。袋綴1冊。後補題簽「古今集真名序注（三条西公条筆／永正十五年写）」、扉題「古今序注」。墨付十六丁。紙背書状案。伝公条筆。識語が二種、書写奥書が一種ある。

〔識語・I〕

伝受之後、宗祇庵主書「此一帖」。以披見。常縁所存少々加筆加詞者也。門弟随一、思尤在之。

仍為後證「又加此詞」早。

文明四年五月三日

平常縁判

この識語は、以下比較するやうに、板本系『両度聞書』の識語と一致する。

〔板本系両度聞書〕

伝受之後、宗祇庵主書「此一帖」。以披見。常縁所存少、加筆加詞者也。門弟随一、思尤在之。仍為「後證」又加「此詞」早。文明四年五月三日平常縁在判

〔写本系両度聞書〕 * 近衛尚通本

此集伝受之後、宗祇禪師、已後此一帖、常縁少、加筆者也。尤為「門弟」随一。仍為「後證」加「此詞」早。文明四年五月三日平常縁判

と、板本系の識語と一字一句異ならない。

この奥書に続いて、次のやうにある。

〔識語・II〕

古今和讃集両度聞書

初度ハ、文明三月に正月廿八日戌刻始之。四月八日午刻成就早。後の度ハ、自六月十二日巳時一始之。七月廿五日巳刻功成早。

前後相違之時ハ、以朱？（尊經閣本作付）之者也。

これらの識語は宗祇のものであり、『両度聞書』諸本中で、宗祇自筆本の佛を比較的保存してゐる系統であることを暗示してゐる。

以上の識語の後に書写奥書がある。

右抄、以御自筆一写之。自午刻一至酉刻一終了。

永正第十五九月朔日

このやうに、書写者の名がないのだが、公条かあるいは実隆と見て良いやうである（筆者は後補題簽が見る如く公条筆だろうと思ふ）。

*

*

*

以上、公条の古今学を伝へる資料はまことに寥々たるもの、実隆や実枝に比すべくもない。古今学に限らず、そもそも公条に《学》がありえたのか、といふ素朴な疑問は、研究者に等しく課された難題である。「公条は継承者に過ぎぬ」といひきるだけの資料を我々は持ち合せてをらず、まして肯定するだけの資料もないのである。ミッシング・リンクといふべきだろう。

八、実枝説

実枝の古今学は、幽斎への伝授書『伝心抄』に集約されてゐる。

『伝心抄』の成立・特色等については、片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題 四』（赤尾照文堂・昭59・6）IV「宗祇流から三条西家流へ」で詳述されてゐるので、小論では重複を避け、片桐氏があまり筆をさかれなかつた論点を中心に述べてゆかうと思ふ。

i 伝本

『伝心抄』は大きく二段階の成立過程があり、しかも各々に《証本》と称すべき伝本があるので、従来伝本調査はほとんどなされて来なかつたが、一応これまで調査しえた伝本を簡単に報告して置く。なほ、アルファベットの大文字を付した伝本は、片桐氏前掲書で紹介されてゐるもの、小文字は筆者が追加した分である。

【甲類・元龜3（天正2年相伝本系統）】

A 天理図書館蔵『古今和歌集聞書』（九一・二三・イ一四五） 幽斎自筆、実枝朱筆書入れ。『弘文荘書目』20所掲。

b 京都大学附属図書館中院文庫蔵『伝心抄』（中院VI・一一） 江戸初期写。Aの転写本？

【乙類・天正4年幽斎清書本系統】

C 宮内庁書陵部蔵『伝心抄』（五〇・二・四二〇） 幽斎自筆、智仁親王貼紙書入れ、実枝加証奥書「此集一部之説伝授之聞書三冊并／序分一卷（面授口決証明之奥書等、別紙在之。／於「草本」者、為「後証」令「抑留」者也）／数日相對而、具令「誦合」訖。其義、誠如「合」符節。雖「班馬」何及之。併為「此道之」／一人当千者乎。／天正丙子歲小春吉辰權大納言（花押）」

d 国立国会図書館蔵『伝心抄』（別一五・三二） 江戸中期写。Cの転写本。

e 筑波大学中央図書館蔵『伝心抄』（ル・二一〇・一一二） 江戸初期写。Cの転写本？ 薄墨による同筆書入れあり（後述）。
f 東山御文庫蔵『伝心抄』 未見。井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 室町後期』による。

g 弘文荘旧蔵『古今集伝心抄』 未見。『弘文荘書目』20所掲。曰、三条西実枝聞書 元和寛永頃古写本 三冊 二八〇〇円 美濃判の幅広き形、十二行、美写、朱藍二色の書入れあり。巻頭には「古今和歌集聞書」とし、その下に「元龜三年十二月六日」と注せり。第三冊の末に「天正丙子小春吉辰 權大納言判」

とす。丙子は四年、權大納言は実枝、時に年六十六。原装極上本。

《考》eは弘文荘旧蔵であり、元和寛永頃古写としても不思議ではなく、しかも朱藍書入れもほぼその通りだから、あるいはe||gなのかもしれないのだが、eは『伝心集』を含む四冊本であり、gとは別本の可能性が残されるので、一応別に掲げた。

ii 注釈方法（片桐前掲書の整理）

- ① 写本系両度聞書と深い関係にある。
- ② 逸話的要素を盛り込んで、受講者にサービスしてゐる。
- ③ 宗祇によつて注釈方法として取り入れられた「裏説」「下の心」を、今一歩進めてゐる。
- ④ 宗祇説を批判する部分もある。

以上の4点の中でも、俄には同意しがたいもの②があることはあるのだが、今後の『伝心抄』研究の礎石となることは疑ひない。

なほ、片桐氏はAに頻繁に見られる貼紙の書入れを幽斎筆とされるが、既に『圖書寮典籍解題 續文學篇』が指摘するやうに、これは智仁親王筆であり、訂正しておきたい。

注釈方法は勿論①④までで尽きたわけではなく、今後の検討によつて更に解明されるものは多いだろうが、以下、私見をここで提示してみたい。もとより試論であり、未だ熟したものではない。

⑤ 注釈方法として《部立》がかなり意識的に用ゐられてゐる。

石ばしる滝なくもがな桜花たおりてもこみぬ人のため（春上・

滝ヲ隔テミタル花也。花ノ滝ニ見タル説アリ。不_レ用。花ノ滝ナ
ラバ落花ノ部ニ可_レ入也。此集ハ部タテケヲカケルヤウ也。関東
二木戸ト云者アリシ也。下冷泉持為弟子也。ソレヲハ、花ノ滝
トミタル也。此哥ノ心ハ、折ベキ花ナレドモ、道ガナクテ折レ
ヌ故也。又、滝ノ辺ノ花ノ景氣、言語道斷ナレバ、折テ帰ント
思ヘドモ、滝ガ折ソヘラレヌ程ニ、滝ナクモガナト読リ。猿丸
ガ哥也。(Aによる。以下同様)

無用の誇りを受けるかもしれぬが、若干の語注を施しておく。

「ケヲカケタル」とは、「野を掛けたる」の謂であり、「けをかけた
る金の筋」(源氏)鈴虫といふ用例が参考になる。この用例は、界
線を金泥で引いたものであり、ヘケ界線・野」と考へてよい。
『河海抄』が「計又堺金」と注する通りである。なほ、『日葡辞
書』には「野を掛くる」に「野線を引く、あるいは、定規をあてて
線を引く」の意味である。といふことは、当時の日常語であつたか
もしれない。すると、この「部タテ」は、所謂春夏秋冬恋雜といつ
た部立ではなく、現在の学術用語でいふ「構造」「配列」「構成」な
どに当たる内容と考へられる。従来の研究史では、『古今集』の構造
論は契沖の『余材抄』から始まるとされて来たが、その萌芽は遅く
とも既に『伝心抄』に見られるのである(もつとも、宗祇流における部立意
識を早く指摘・考究された、新井栄蔵氏の如き先学もあるが)。

「関東二木戸ト云者アリシ也」の木戸某は木戸孝範のことで、『孝
範集』『東野州問書』等から持為の弟子であつたことが確認されてゐ
る。ただ、孝範にまゝつた古今集の注釈書は残されてをらず、こ

ある説に、是は落花の哥也。なぐるゝ花なればおられぬとよめ
りといへり。不_レ用_レ之。是はまだ部立も落花まではゆかぬ也。
滝をへだてゝみる花なるべし。

【東大本小字片仮名注】

滝ガナカラズルニハ、花ヲトリテコンズル物ヲト也。面ノ心
ハ、滝ヲ隔ガタシト也。又ノ心ハ、サテモ見事ナル花ト思テ折
ント思ニ、石バシル滝、又一ノ興也。花ヲバ折ベシ。滝ハ折り
トリガタキヲウチソヒテ、滝ナクモガナト云リ。

『両度聞書』では、未だ部立のことは述べられてゐない。ただ、
「……心の外、義なし」のいふ口吻には、孝範説の如き異説に対す
る無言の反感が感じられなくもない。『古聞』になると、「哥の次第」
を根拠にして、異説に対する反論を述べてゐる。即ち、宗祇におい
て『部立』を注釈方法とする意識は既に芽生えてゐたのである。事
実『両度聞書』では、例へば「部立あはぬ恋也」(五八二)「かやうの事
は部立にて其心をしるべし」(六二六)の如く、『部立意識』がはつきり
と成立してゐた。たまたま五四番歌の注では、その「語」が出現し
なかつただけといふのが実情だらう。『鉅訓和詞集聞書』が「部立」
といふ術語を持ち出すからといつて、創意とはいへまい。つまり、
『部立意識』は宗祇において成立してをり、しかも注釈の方法として
も用ゐられてゐたのである。『伝心抄』は、宗祇・肖柏・宗碩・実隆
らの手をへつつ成長して来たこの方法を、量・質ともに完成の域に
まで高めたといへるだらう。この点で、『伝心抄』は文字通り、宗祇
流古今集の集大成と評しうるのである。

の証言は貴重である。然し、孝範は文龜頃没したと推定されてゐる
から、以下引用されてゐる孝範説なるもの(落花説は、一応吟味の必
要がある。ところが偶然にも、猪苗代兼載の講釈の聞書である『古
今秘聞』に「此歌、木戸殿説トテ宗祇云、石走ル滝ノサラ／＼ト
落ル如ク、手折ル時ハ脆ク落ル程ニオラレヌよし也云々。面白キ説
ナレ共、歌ノ編様、落花ノ部ニテハナシ」とあり、正しく孝範説と
知れる。ただ、兼載のいふことが正しければ、この孝範説、宗祇が
管理してゐたらしく、『伝心抄』も、関東方なり冷泉方から仕入れた
説といふよりも、宗祇管理説の一として享受してゐたと見るべきだ
らう。

「言語道斷」は「良きにつけ悪しきにつけ、ある事を強調して言
うのに用いる言葉」(日葡辞書)で、その場合は無論前者の意。
さて、『伝心抄』のこの注(就中「部タテ」は、宗祇流諸注の中でど
のような位置を占めるだろうか。次に比較する。

【両度聞書】

滝をへだてゝ花のおりがたき心の外、義なし。石ばしる滝なく
もがなといへる、幽玄に侍るにや。俊成卿いへり云々。

【古聞】

此哥、猿丸が也。彼家集にも「山川に」ト有ヲナラシテ入ル。
当流は、滝をへだてゝ花を見たる也。哥の次第、落花の部にあ
らず。哥の心は明也。古来風躰ニ、此哥をまことに優にも侍候
とあり。吟味すべき事也。

【鉅訓和詞集聞書】

ところでこのことは、別の面からも検証しうる。

春夏秋冬の巻名に対しても注釈を施すことになつたのは、それほ
ど古いことではないやうで、管見の限りでは、『古聞』が比較的早い
ものである。今、『古聞』と『伝心抄』を対照させつつ引用してみよ
う。

◇春上

【古聞】

春の内を上下にわかつ事、をよそ二月廿日あまりの比までを春
の上と心うべし。又は、年による事もあるべし。

【伝心抄】

春ノ季ヲ上中下ト三ニ分タルモアリ。正三三月トワカルベシ。
又上下ト分タルハ、正月ヨリ二月ノ半迄ナルベシ。下ノ心モ上
ノ如ク也。

◇春下

【古聞】

春下は二月末つかたよりの心也。

【伝心抄】

上巻ノ所ニ正月二月末マデノ哥アリ。下巻ハ、二月廿五六日ヨ
リ末ノ事アル也。

◇夏

【古聞】

夏哥の決策、不定ニみえたり。古は夏哥おほくもなかりけるに
や。郭公の哥の外少シ云々。

【伝心抄】

夏ノ哥ハ、部立少々チロクヤウナレドモ、其、猶面白心アリ。道具スクナキ故也。

◇秋上

【古聞】注×

【伝心抄】

上下ノ心、春部ニ同。秋ノ哥、七十八首アリ。秋哥ノ多心ハ、秋ハ陰氣ノ初也。人の情が物感ズル氣也。發生ノ氣ハ陽ノ心ニテ、春也。秋ハ殺氣ナリ。春ニタイラゲラレテ感ズル道理也。感ズル氣有ニヨリテ、哥数多也。

◇秋下

【古聞】注×

【伝心抄】

春ノ上下ノ心同ジケレバ、不_レ及_レ注。

◇冬

【古聞】

四季を六卷とする事、六義を表す。又は六根をも。

【伝心抄】

冬ノ部ニ至テ、此義末ニ被_レ仰聞義也。サレドモ、次ニ被_レ読之由在_レ之。部立ノ心ハ、四季ヲ六義ニ表也。春ガ上下、秋ガ上下、冬ト夏ト以上六義也。拾遺・後拾遺ニハ八卷ニスル。ソレハ八雲ヲ当テ書タリ。此集ノ心ハ六根六色ノ心也。又、天地人ノ三サイノ義也。陰陽和合シテ、万木千草モ生長スル也。天地

人一モカケテハ、一切之事無_二成就_一物也。五形ノ上カラ一サイ

ノ事出生スルニヨリテ、恋ノ部ヲ五卷ニスル也。五形ガカクレバ哀傷ニナル間、恋五卷ノ次ニ哀傷ノ卷ヲ入也。又賀ノ哥ハ、春秋ノ心ニアリ。風雅、又一年モ春秋ニヲサマル也。物ノ名ハ、世間ノ事ヲ云也。賀ハ古代也。又賀ノ卷ヲ親ノ卷ト云也。人ガナケレバ、一切仏神モナキ間、如此云也。

惣別、古今ハ五卷也。残十五卷ハ並也。春ハ上下ナレドモ一卷。秋又同。夏一卷、冬一卷、恋ノ部ガ五卷ナレドモ一卷、以上五卷也。

『古今集』全20巻を、一つの体系として認識することは、既に『古聞』において明瞭だが、『伝心抄』は特に冬部の注釈に見られる如く、陰陽・六義・五形・天地人・並といった概念を援用しつつ、完璧に体系化したといつて良いだらう。なかでも、並の概念は、中世源氏学の重要な「武器」であり、かつその方法的深化には、実隆・公条・実枝らが深く係つてゐたのだから、ここに三条西家古今学と源氏学の交錯を認めても、大きな誤りとはいへまい。

さて、以上比較したやうな巻名注釈の深化が実枝においてなされたのかといふと、どうもさうではないやうである。東大本小字片仮名注に既にほぼ同趣の注が見えるのだ。

一年中ノ終ヲ六卷メニアテタル、面白シ。六義ニ表セリ。六義ノ外ニハ歌ノナキ也。拾遺・後撰ハ、八卷メニ冬ヲ置也。八雲ニ擬ス。一年ノ終ニハ、又賀ヲ始テ置也。賀ハ天地人ノ土代也。土代ヨリ五行出来タリ。其次五卷、恋ハ五行ノ上ニテ出来タリ。

故ニ五卷也。五行終レバ哀傷也。故ニ十六卷也。六義ヲ配当ス

ル時ハ、冬ハ頌也。春ハ風也。賀ノナラビハ春秋也。六義モ風雅ニシ_レマル時ハ、一年モ春秋ニ取也。物名ハ、敵ヲ神世ニウケタル顔也。歌ノ面ハ、其物ニテハナクテ、ヨクミレバ其物也。他家ニハ十卷ヲ灌頂ト云。当家ハ不然。古今ハ只五卷也。残十五卷ハナラビ也。春ニ卷ナレドモ、只ヲサメテ一卷。秋一卷ト

賀一卷。恋ヲモ一卷。十卷ヲ一卷トス。是ガ五卷也。哀傷ハ恋ニ属スル也。廿卷ヲ加レバ六也。雑ハクサ_レ物也。サリナガラストヲアツメタルゾ。賀ハ祝、語ハ地也。地ノ上ニテ、万事ヲ成スル也。哀傷ニテモ、賀ヲ土台トスル也。哀テモ子孫繁昌ト云也。賀ヲバ親卷ト云。六義ノ親也。(冬)

⑥『古今集』が貫之の撰集であるといふことを強く意識してゐる。これは何も『伝心抄』だけの特色とはいへないけれども(例へば兩度聞書三六三注、注釈の方法としてこの視点を多々取り入れてゐるのは、注目したい所である。

(春上・一二)

「今モカモ」ヲ心得ガタキト云テ、「色モカモ」トカキタル本アリ。不_レ用。此哥ハ猿丸ガ也。家ノ集ニハ「色モカモ」トアリ。何トアル心ニヤ。貫之ガ如_レ此書入タリ。「今モカモ」ハ今カ也。二ノモノ字ハソヘ字也。前_レ見タル所也。ソレヲ今カサクラント云也。タチ花ノ小嶋ト云ハ、タチ花ガカホル物トナレバ、一入コノ小嶋ノ山吹ハ句ふベキト云義也。

「今」と「色」といふ本文の対立に際して、「貫之ガ如_レ此書入」

たのだから「今」を採るべきなのだ、と『伝心抄』はいふのである。即ち、貫之達撰者は本文への「介入」を許されてゐた、と実枝は見ているのである。この認識は、⑤で指摘した部立意識と密接にかかはるいへよう。『古今集』とは、和歌が自然に集合したものなどでは断じてなく、撰者就中貫之の「作品」なのだ、といふ認識が実枝に強くあつたと思はれる。

では、宗祇流古注では、この歌についてどういつてゐるのだろうか。

【兩度聞書】

もとみしを思いづるよし也。「今もかも」はいまか也。もは例のそへ字也。猿丸哥也。頭昭ハ小嶋のくまといへり。

【古聞】

明也。今歌也。もはそへ字也。もとみしを思ふなるべし。頭昭はこの嶋のくまといへり。猿丸が哥也。

【鉛訓和詞集聞書】

元来此山吹をみたる人のよめる哥なるべし。「今もかも」とは、いまもや咲句ふらんの心也。もの字はそへ字也。

【宗碩聞書―兩度聞書】

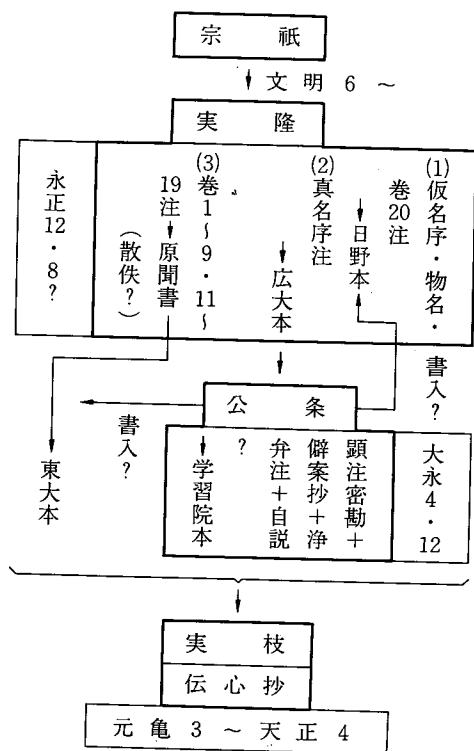
【東大本小字片仮名注】
小嶋名所不_二分明_一。

このやうに、貫之訂正説は見当たらない。実枝自身の私案であらうか。

然し、『古今集校本』には、「色もかも」といふ伝本は報告されてをらず、僅かに前田本・真田本の異文注記に「色」といふ本文が見られるだけであり、実枝のいふ「色モカモトカキタル本」の正体は不明である。

九、まとめ及び残された問題について

今まで論じて来たことを、図示し整理しておく。



前図を掲げるに際し、本論では深く述べなかつた点が含まれてゐるので、その事を論じて置く。

また、東大本を原本ではなく、その転写本と考へた。これも、確たる証拠はない。書物全体から受ける印象が、実隆自筆の日野本より若干新しく見えるといふ、全くの個人的感触によるものであり、このことを強く主張するつもりはない。東大本の筆跡は明らかに実隆様である。然し、世に実隆様をよくものする人物は多かつたやうだし、他ならぬ公条が実隆様の第一人者であるから（実隆と公条の筆跡は区別しにくい）、前図の如く考へたわけである。

さて、蕪雜で長々しい論を終へる前に、残された問題をいくつか指摘することにした。

①実隆・公条の講釈の聞書は本当に伝存しないのか？

例へば実隆は、永正7年2月3日諸子のために夏・秋上を読んでゐるし（因に云、この当時古典を「読む」といへば、簡単な注釈を施しつつなされるのが通例である）、公条も後奈良天皇に進講してゐるのだから、聞書の内容は充分予想しうるのである。にもかかわらず、我々の手に出来る注釈は、実隆・公条ともに《書入注》だけであるといふのは、いかにも妙である。博搜は継続されるべきだが、「本来も存在しえなかつた」といふ結論が得られる日のために、「対策」を講じて置く必要はあらう。

②その後の三條西家古今学の行方と享受

当面は、実条の仕事(宮内庁書陵部に実条注が数点所蔵されてゐる)の調査・検討があろう。また『伝心抄』自体の享受史も考察されてしかるべきである。筆者が知りえてゐる資料二点を紹介して置く。

入注

この伝本のことは既に第八節^①で簡単に紹介したが、宮内庁書陵部本の忠実な転写本と思はれる。この本には薄墨による同筆の書入注が多々見られ、この注が『伝心抄』の〈疏〉たりえてゐるのである。一例を引用して置く。

田むらのみかどの御時に、斎院に侍けるあきらけいこのみを、はゝあやまちありといひて、斎院をかへられんとしけ

人ノ上ノ事ヲ、世上ニハ色々ニ云物ナレドモ、ナキ事
ハナキニテトラルト云義也。天ニワタクシナキ心也。※
へゝは伝心抄になし。

を、そのことやみにければよめる
〔此事相違也〕
 文徳天皇也。齋院は嵯峨ノ御時ノ事也。慧子、母アヤ
アキラケイコ
 マチアリテ御フクロノ事也。光雄ノ女也。

あま敬信〔ヨルカノ朝臣ノ母也〕
おほ空をてりゆく月しきよければ雲かくせども光けなくに〔雑
上・八八五〕

慧子内親王は「賀茂齋院記」に「文德天皇第八皇女也。嘉祥三年七月卜定。大_ニ祓_ニ於建礼門_一。仁寿二年四月、慧子禊_ニ於河浜_一。始入_ニ齋院_一。天安元年二月廢_レ之。遣_ニ右大臣正三位藤原良相_一於神社_一告_ニ事由_一。其事秘故世無_レ知_レ之」と見え、その時期が(当然といへば当然ながら)文德天皇の御代と重なる事が分かる。従つて、何故『伝心抄』が「嵯峨天皇ノ御時ノ事也」などといふ時代錯誤を犯したのか全く妙なのだが、それはともかく、この薄墨注の指摘は正しい。

〔β〕京都大学附属図書館中院文庫蔵『古今抄』（中院VI・五六）

本書は5冊本であるが、その内の1冊に関しては、第六節の日野本の項で、日野本の転写本であることを指摘して置いた。残る4冊は日野本とは全く別の本であり、『古今集』の全注である。江戸初期写。外題と内容は次の通り。

〔第1冊〕「古今抄」寛文「春」 仮名序注。墨付三二丁。
〔第2冊〕「古今抄」寛文「夏」 春上〜冬。九五丁。

【第3冊】「古今抄（寛文）秋」 賀々哀傷。一二三丁。
【第4冊】「古今抄（寛文）冬」 雜上々雜鉢・物名・卷20・真
名序。一一八丁。

書名をあげつつ引用される古注は、『顯注密勘』『僻案抄』『延五記』
などであるが、『祇抄』『祇注』として『兩度聞書』（系）の注も引かれ
る。更に注目すべき点は、数は少ないものの、『伝心抄』もはつきり
それとして引用されてゐることである。

伝心抄ニ云、コ、マデ三首、人丸哥也云、（第3冊59丁表）

また「読人不知ノ」、数多ノ義アリ。何ニモ書ノセタレバ、事ナ
ガシクナルホドニ、サシヲカル、也」（3番詞書注）ともあり、本
書が聞書である可能性を示唆しよう。

まとめるならば、本書は、先行古注を重視しつつ（寛文年間？）な
された講釈の聞書と考へて良いと思ふ。

さて『伝心抄』とのかはりだが、前節でも引用した部位注（春上）
を一例として見てみよう。（下段図参照）

このやうに、『伝心抄』の影響は明瞭である。

三条西家古今学は、江戸堂上歌学に様々な影響を与へたと思はれ、
同趣の資料を博搜することによつて、逆に、三条西家古今学の全体
像を推定する基盤が得られるだろう。

【後記】

一、小論は、ここ一年余続けてゐる「兩度聞書会説」の場で、提
示・討論された内容を筆者なりに調査・検討し発展させたもの
である。会説に参加された方々のお名前をここに掲げ、その学
恩に深く感謝する次第である。

黒田一仁 満田みゆき 石神秀美 ルイス・クック トマ
ス・ドナヒュー（敬称略、順不同）

特に、東大本聞書の発見、及び古注史における基本的な意義を
解明されたのは満田氏であり、本来氏の名で最初に発表される
べきものではあるが、筆者も改めて考察を加へ、満田氏の見解
とは若干異なる所も出て来たので、小論をあへて組み入れたわ
けである。

一、小論の骨子は、鈴木一雄氏を中心とした平安文学研究会で発
表した。その折、種々の貴重な指摘を頂いた。深謝申し上げ
る。

一、資料の閲覧・撮影及び後掲の翻刻に際しては、所蔵機関より
格別の便宜を与へられた。感謝する次第である。

一、小論は、昭和58年度科学研究助成費（奨励研究A）による研究成
果の一部を含む。

（3／6／85）

【附載資料・宮内庁書陵部蔵『実条公遺稿』】

【凡例】

古	聞	伝	心	抄	中院本古今抄
春の内を上下にわか つ事、をよそ、二月 廿日あまりの比まで を、春の上と心うべ し。又は年による事 もあるべし	春ノ季ヲ上中下ト三 二分タルモアリ。正 二三トワカルベシ。 又上下ト分タルハ、 正月ヨリ二月ノ半迄 ナルベシ。下ノ心モ 上ノ如ク也。	春部、上中下ノ三ニ 分タル集モアリ。此 集ハ上下也。三二分 タルハ勿論正三月 也。上下二分ル時ハ、 正月ヨリ二月半迄上 也。下亦同ジ。			

論題にも明示した如く、小論は資料の点検に終始し、三条西家古
今学の学的方法やその思想性については、窮めて僅かな事柄しか論
じえなかつた。今後を追究したいとは思ふが、実は、『中近世古今学
史』から問題に迫らない限り、その論は所詮、手持ちの資料を土台
にしてあたりを見回した程度のもにしかなりえず、小論もそのよ
うな批判を受けざるをえないものである。しかし、『中近世古今学史』
は演繹によつて導かれるものでもなく、一つ一つの資料の吟味・検
討・比較などから帰納されるべきものであり、その意味では、小論
の如きものも、ある程度は意義を主張して良いと思ふのである。

一、安土桃山から江戸初期にかけての三条西家の学問の総体を知
りうる重要な資料として、本論でも触れた宮内庁書陵部蔵『実
条公遺稿』（柳・三一三）墨付41丁表5行目以下、巻末までを翻
刻した。

一、底本の表記を出来るだけ保存したが、翻刻にあたっては以下
の方針を立てた。

一、漢字・仮名は通行の字体に統一したが、一部底本の字体を残
した。

【例】哥↕歌 紙↕帋 等

一、踊り字は「々」に統一した。
一、小字の肩注・割注・細注等は、すべて「」に入れて本行と
同じ大きな活字にした。また、底本ではままたかかなを本行
でも小さく書くが、これも同じ活字にした。

一、改丁を「」で示した（面移りは省略した）。

一、底本では、ほとんどの書名の上に「一」と打つが、これをす
べて省略し、その代りに項目と項目の間を一字空けた。

一、翻刻を許可された宮内庁書陵部に厚くお礼申し上げます。

【翻刻】

幽齋江借入本共覧（此外二）（猶有歟）

朗詠抄一冊 誓集抄一冊 三十首和哥一冊 哥合抄一冊 着到御哥
一冊 称名三光哥一冊 逍遙院詠草三冊 三光院詠草一冊 逍遙院
百首 道堅百首 袋草紙 称名院哥一冊 康正哥合一冊 雑々記一

冊 応永行幸記一冊 詠大一冊 御八講之記 表紙ナキ抄一冊 真
光記二冊 色葉抄一冊 万葉拔書一冊 万葉一冊 万葉作者 万葉
抄一冊 万葉書 万第四 職原聞書 雑々聞書(上) 和哥之端作
了俊抄 近來風跡 正説記三冊 藻塩草(雜聞) 大内被申聞書 長
秋詠藻(筆実隆鳥ノ子六ハシ歟丹後也足亨ニテ) 雑々本(同) 卷
物共 目錄外草子九冊 伊勢物語抄(表帑ナシ少々) 三光院実隆
へ不審 風土記(大和ノフヤランノ也)一冊 八雲(拔書口伝但も
足ニカ)一冊 一所(但も足)一冊 弄(全)七冊 聴書(奏)一
冊 私源聞一東 私抄(桐壺)一卷 同(帚木空蟬)一卷 同(初
小蝶螢)一卷 同(自葵至權) 奥入一冊 勢抄(聞書)三帖 竹
取一冊 詩字六冊 続古(下巻斗) 雜宴抄二冊 曆五冊 曆代二
冊 陵谷集一冊 筆譜等二冊 連哥三冊 簾中四冊 祈明一冊 詩
格五冊 日中行事一冊 日本紀抄一冊 御裳濯河哥合一冊 水無瀬
百首小冊 密勘三冊 狭衣系図 百寮訓要鈔一冊 神葉日記一冊
小嶋ノスサミ一冊 貞治御鞠和字記(キタカツキト号ス)一冊 (応
安)諒闇和字記一冊 思ノマ、ノ日記一冊 白鷹記一冊 魚鳥平家
一冊 愚問(頭注)一冊 筆ノスサミ一冊 (同)筆ノスサミ二冊 近
來風跡一冊 連哥式目一冊 さよのね覚一冊 公事根源抄(上下)
仮名 神樂催馬楽注(秘) 三光双覽廿二社垂跡 重編職源一冊 令
抄一冊 江次第抄 御讓位御即位御禊大嘗会和字抄一冊 日本書記
纂疏三冊 元亨釈書注 勸修念仏記一冊 樵談治要一卷 文明一統
記一卷 花鳥 愚見抄 連哥合璧集(上下) 連哥新式今案一冊 古
今秘抄一冊 歌林良材集(上下) 四書童子訓一冊 源氏和字抄六

冊 関藤川記一冊 雲井ノ春一冊 東齊隨筆一冊 除官雜例一冊
歴代叙略一冊 玉吟 月清集 論語聴書(実世歟) 老葉 春日社
驗記絵詞 相国寺大塔供養和字記一冊 北山女院入内和字記一冊
北山行幸和字記(上下)一冊 御禊大嘗会和字記一冊 連哥双(兼
載宗碩等) 仙源抄 和哥初学抄 新執往来(上下)小冊 新撰消
息(巻下)一冊 (文禄三二月廿六)伊勢物語抄(少アリ表紙ナシ
但も足ニ有ル歟) 佐理筆ノキレ 中將ギ馬(筆実隆) 三光院実
隆へ廿ヶ条ノ不審 雑々本共詞ナニヤラン巻物共
右外於本共有カ可尋

中院也足ニ借分

源氏抄(小本也大方帰ル猶有歟二卷可尋) 古今抄(二冊歟伝心ト
云) 古抄(打疊) 称名院哥(此内一冊自筆)二冊 三光院哥一
冊 同詠草(同)連哥草子 琵琶引(同)長恨哥(合一冊筆実隆也)
ナニヤラクワイシ 日本後記(同日本紀ノルイノ事) 公卿補任(後
深草此外ノモ) 続拾遺集(中院御方ニ歟) 公忠筆(中院御方)
佐理筆(ウツシ端ナシ) 同 新古今詞新統古統後拾遺(撰歟)
(此分但幽齋ニ有ル歟) 飭抄全(帰ル也未タラスカ見可合也)

遣迎院(九応)

中臣祓一 百首二 初心抄発句一 五十首哥一 菟玖波集抄出第一
一 蹴鞠肝心抄一 若草の記一 三人千句一 千句一 一園一
哥ノことは書たる物 恵心僧都御作一卷 式目(筆西室) 一 庭訓
(全部二トフリ一ツハカンナツケ何モ上下ツ) 連哥一 正風跡一
名寄本一 三鉢詩(是ハ転本本也同表帑)三冊 五部大セウ経(筆

称名院) スダケ数十二 カケ字(一ツ唐筆東海翁トアリ二ノ一ツ
ハ天翁ト有当寺ノ天翁テハナシ) カウクキ(同上下実隆カ)但水
中ニ有カ 例時懺法(筆実隆表紙赤也)二 詠哥一鉢一 後花園院
御短尺十五枚 年中行事(筆実隆カナ付アリ)一卷 百官書物一 職
原抄(カナツケノ本筆少輔也)一 銘ツクシ一卷 公方ノ系図(筆
実世其類此方ニアリ猶此ルイノ有カ可尋一枚但甫庵ヘイクカ) 品
経和哥一冊 皇流高(筆実世小本外題) 表紙紫カ 一冊 皇年
代記(筆西室)一冊 十八史略一冊 堀川百首(二度分但花少カ水
カ)一冊 今上御筆 ナンカウ かうろ箱 やくわん 右外猶可有
也 朗詠(転中ノ本ノカ有ルカ) 哥書(ホウハ双草三冊筆実世)
正親町院 ナニ双草ヤラ一冊(幽齋ノ子アココ福寿院) 高嶋水
(幽齋者神左ニアリ) 紫竹水丁右近 朱印四ツ(但木所ニモ有カ)
同 花山家伝(二巻実隆筆也)花山大 堀川百首(二度分花山少将)
改元ノ難陳次第(慶長ノ度ノ也)同 短冊(トノソ可尋)同 下官
書タル物(ナニヤラ不覚)甫庵 (慶長九六三) 公方系図(筆実世
一枚也但九ニ有カ)同 ヤウキウ木クワリンカ藤中納言 十文(除
目一ツタレ家ノト覚ユ) マリ扇(一ツフルキノ也) 飛鳥井 カウ
ソキ(二冊筆実隆但九ニアルカ水無中納言) 堀川百首(二度分)
水中将(但九カ花山少将カニマルカ) 西室筆(一巻実隆哥也)四
条 西室懷帑(一枚四条) 同筆(短冊十枚)同 (慶長十一六廿
九)百人一首抄(宗祇抄也半切カ本也) 持明院御方

転法輪

哥仙伝 称名院懷帑(一枚) 同短冊五枚 葉衆抄一冊 葉草子五

冊 教国三首懷帑一枚 同短冊五枚 無外題(上下) 枕草子(上
下但一冊カヘル也)水無瀬 水無瀬家系図(二枚実世筆)水無瀬 職
原抄(スリ本) 松木 (慶長十七八廿三) 日本紀(二二アリ神代卷
中院シテ仰也) 今上 同七冊(以上全部何も実隆筆也) 今上 右八
冊ノ内一冊返し被下候 初音ヨリ六七冊之分也一冊也抄小本飛鳥井
史記歟漢書歟抄(小本慶長十七虫ハライン時借スト覚可尋) 水無瀬
愚亭月次之懷帑短冊(三月歟二月歟ノ也) 中院 風雅集(上下) 西
園寺 六百番哥合(二冊) 白川殿 スイシンノ太刀中院 河海抄(家
本一冊宇治ノ一部アリ) 中院 新千載(上下) 玉葉(上中下) 中院
六百番哥合(上恋部)是安 次ノ百首中御門

借り写スヘキ物覚

頭注密勘 古抄水無瀬 新古抄中院飛鳥井 源氏奥入 河海(不足
分別紙) 花鳥(不足分別紙) ロウ花 セン源抄 三見一覽 関
白秀吉へ公国遣源抄ホウク草子同侶也也ニアリサイ流同物ト也 細
流(実隆カ公条カ抄也) 源抄(三光東ニテウシナフ本ト也) 今川
ミンカウニツソ幽齋 源抄(少シツ、アル分実隆カ公条カ也) 今上
宗祇抄(源) 常縁抄(源) 水原抄(源) 他 シメイ抄(源他)
源抄九条禅閣抄 源抄(太閤秀次へ遣スホウク抄) ウツホ物語 ト
シカケノ本(ウツホノ) スミヨシ物語 大和物語(ニトヲリ有カ)
竹取物語 むくら 宇治物語 はま松 なこしこの物語(草双ノ由
也) 夢のしるへ(さ衣ニヒカレタル本也) つれく草 保元平
治物語 狭衣物語 同抄(連哥シノセウハ作下ニモト云カ) 伊勢
物語抄(幽齋) 伊勢抄(水無瀬中納言転中ニ有) 伊遣い抄(清

三位入か) 伊勢抄(三光三間書ノトヤランノ也)三扱二有 同抄
〔常縁宗祇〕 百人抄〔幽斎〕 同抄〔水無瀬中納言〕 同抄〔常縁
宗祇〕 百人一首〔実隆筆〕 九条殿内衆 詠哥大抄〔幽斎〕 同抄
〔水無瀬中納言〕 同抄〔某家ノト也〕 ユキ庵 詠大〔実隆筆〕 徳大
寺 同抄〔常縁宗祇〕 雨中吟未来記抄〔幽斎〕 同抄〔水無瀬中
納言〕 同抄〔常縁宗祇〕 万葉集〔不足別紙〕 新撰万葉集 廿
一代集〔不足分別紙二書也〕 千五百番哥合〔不足分別紙二書也〕
哥合共〔遠近別紙二書也〕 〔卅六人〕 家集〔不足分別紙二書也〕
家集〔遠近別紙二書也〕 六家集〔拔書夢庵作ト也連哥ノ用ト也〕 指
南類聚〔上下〕 転中納言〔上ニハ詠哥 新髓 八用 和秘 八代秀
百人一首 未雨 毎月抄 下ニハ八口伝為家作 愚問賢注後普タル
ト作 近來〕 新撰スイナフ 和哥スイナフ 六帖 ケン存六
帖 新撰六帖 古今六帖 愚モン類シユ 哥林良材集 五代カン用
抄 桐火ヲケ〔他家ノ物也〕 ラボク 同拔書〔幽斎〕 四天王寺
障子名所哥 建保名所哥 保治ノ度百首 建保百首 為家千首 建
仁百首 為家一夜百首 宋雅〔題有〕 千首〔ケイカ飛カ〕 称名院
キヤウカ合〔判実隆〕 女院 聖コ院道澄百首〔実世点〕 伯 三光
院吉野ニテノ百首〔飛鳥井〕 三光院百首西園 実隆判哥五辻 一
二ヨリ十マテノ題ノ哥〔五辻〕 実隆公案実世〔此外当家合点哥類
同判ノ哥合〕 逍遙院八十賀時哥共〔短冊也〕 木村 称名院七十賀
時短冊 明題類 明題抄〔題ノチウアルト也〕 題林抄〔題ノチ
ウアルト也〕 経文哥書一冊〔下部〕 甫庵 続後明題 和哥初学抄
実隆文〔持明院少将〕 揚名介事書物五辻 六百番チン状〔顯昭作〕

今上 人丸誓上ノサン水無瀬中納言 三代集ノ内〔称名院へ不審中
院家ノ人〕 中院 万内字〔カン和ノ時入分拔書幽斎〕 為世ト為兼
ト不立不断ノ事ニ付テノ状共ノ事 宗祇へノ状常縁飛鳥井 名香合
〔実隆判〕 名香合〔公条判〕 土佐日記 左公日記〔トイフ物有ト
也右ヲ云チカエルカ可尋〕 明月記〔同拔書〕 和名抄〔順作ト也〕
方丈記〔鴨長明作〕 カイタウノ記〔同〕 無明〔名歟〕ト傍書ア
リ抄同 春日ノエンキ〔持明院〕 八幡エンキ〔同〕 住吉ノエ
ンキ 諸社ノエンキ共 諸寺ノエンキ共 年代記〔畧ノモ〕 水無瀬
元秘抄〔書ツキノ分改元ノ事ソ〕 同 キンヒ抄 レン中抄 公事根
源抄 有職事〔実隆ニ不審ヲホチ西国人也〕 持明院 諸家伝〔山科
家ヨリ出ル也〕 水無瀬 諸家系図〔目錄別紙〕 名目抄 弘安礼セ
ツ 公卿補任〔不足分〕 別紙有 太平記 ワウライノ類〔別紙有〕
千字文 玉篇 和玉篇 セツテウセウ インキヤウロサン〔一〕 論
語抄〔クワンスイ聞書ノト也〕 水無瀬 職原カナツケノ本 実隆哥
寄書〔世上ニ有分〕 宗祇哥寄書 常縁哥寄書 基綱哥寄書〔日野
大〕 哥書共転中ニ有分中川ニ有分 連哥テニヲハノ一冊〔水無瀬
三位〕 堀河二度百首 伊勢抄〔黒門ノト也〕 庭田 同水無瀬抄 同
幽斎抄転中飛鳥井 源氏抄〔今川ニ有タルノ也〕 同 百人抄〔幽斎〕
転中 右抄〔水無瀬〕 伊勢抄〔詰本ト也〕 百人歌伊勢歌詠大歌雨
来歌源抄有歌〔一〕 訓経チウ白川 訓経〔正雅三〕 春日エンキ
八幡エンキ〔童子記トヤランイフトアリ〕 中院
右外諸社〔同不分明〕 諸寺ノエンキノ事 実隆〔土左ノ一条殿へ
遣伊勢物語抄〕 三級 同伊勢抄本也〔水無瀬〕 紫塵愚〔トヤラン

源抄トナリ宗祇作ト云 連哥ノテニヲハ書タル本水無瀬 詠大抄
〔宗祇ト也〕 祐甫
唐へ渡リシ僧ニ付て渡リタル〔一〕 書物清水玄長 日本紀抄上竹内
正甫 中臣祇抄同 六根清浄祇同 論語抄同 日本抄〔上下〕 人ノ
本ト也 武家シツケ方ノ書物〔同〕

【解題】

本書の書誌は既に松浦朱実氏「実条公雜記」(伊地知鐵男氏編「中世文学
資料と論考」(笠間書院昭和53・11)の中で詳しく報告されてゐる。今抄記
すれば、27×19・3 cm、袋綴1冊本、墨付45丁。本文・外題ともに
柳原紀光筆。松浦氏の論文には、本書の内「也足に聞申分」(17ウ・24
ウ)のみの内容を持つ早稲田大学図書館蔵三条西実条自筆「実条公雜
記」が翻刻されてゐる。

書陵部本Ⅱ広本 早稲田本Ⅱ略本

といふ関係に整理出来ようが、書陵部本と早稲田本の関係は即断出
来ない。親子よりは兄弟の可能性が高いと思はれるが、確証にかけ
る。

内容は、大きく二つの部分にわけることが出来る。

- ①貸出書籍リスト(↓幽斎通勝(也足・迎院?)・公広?(転法輪))
- ②要借覽書籍リスト

①と②は補完的なものではないやうだ。即ち、三条西家に架蔵し
てゐない書籍が②にリストアップされてゐるわけでは、必ずしもな
いといふことだ。補完する例を見ると、『河海抄』は①の「転法輪」

の項に「家本一冊宇治ノ一部アリ」と見え、②に「不足分別紙」と
ある。反対に、補完的とは考へられないものに例へば『百人一首』
がある。②に見えるのだが、三条西家に『百人一首』が架蔵されて
ゐなかつたとは思へない。恐らく、架蔵本が新写のため、より筋の
良い《証本》を入手する目的で、②の中に含めたものと思はれる。
このやうなケースは、これ以外にも多いだらう。

このリストは古典享受を考察する上で、貴重な資料となるだらう
(例へば、現在、三条西家の蔵書の大部分は坊間に流出し、その極一部が書陵部・学習院
国文研・早稲田大学図書館・天理図書館等に分散して所蔵されるだけであるので、全体
像を偲ばせる恰好の資料である点、あるいは、現在まともな保存されてゐる細川家・
中院家の蔵書の源、のかかりの部分に三条西家の蔵書であつたことが、確実になつた
こと、またこれらの文庫から、かつての三条西家文庫を類推することがある程度可能な
ことなどが、小論では無責任な想像を避け、次の一点のみを論じるこ
とにする。

◆誰の覚書か

単純に考へれば、外題や早稲田本(実条自筆)の存在、あるいは記載
内容に三条西家の人々の名が頻繁に現れることなどから、実条その
人の覚書といふことにならう。結論を述べればそれで良いと思ふの
だけれども、傍証をいくつか示して置く。

- (1)記載内容で慶長期を確実に下るものが無いこと。

最も新しい年時は、①転法輪の項の慶長17年虫払ひといふもの
である。これを補強するものとして、同じ箇所「職原抄スリ
本」と見えるが、『職原抄』の刊本は慶長4年初刊であること、

公広を「転中」「転中納言」と呼んでゐるが、任中納言は慶長11年1月11日であること（時に30歳、実条は32歳）などを挙げることが可能である。従つて、本リストの成立は慶長末年にあたりといふ所だらう。とするならば、実条の活躍した時期と重なつて来る。また、①迎院の項などに「甫庵」とあるが、これは小瀬甫庵のことだらう。彼も文禄・慶長の交に都に住み、書籍の編集・出版に携はつてゐたのだから、時期的に合致する。

(2) 実隆・公条・実枝（実世）の名は見えるが、実条の名は見えないこと。

(3) 登場する家々が、三条家（転法輪）・水無瀬家・中院家・飛鳥井家・五辻家・徳大寺家と、三条西家と特に密なる関係にある家であること。